



Title	僻地農村におけるデカセギの影響
Author(s)	新藤, 慶; 小野寺, 理佳; 濱田, 国佑
Description	第3部 ブラジルにおけるデカセギの影響. 第12章
Relation	日系ブラジル人のトランスナショナルな移動と定住. 小内透編著. (外国人集住地域の社会学的総合研究 ; その8)
Citation	『調査と社会理論』・研究報告書, 28, 281-312
Issue Date	2009-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/38206
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_p281-312.pdf



第12章 僻地農村におけるデカセギの影響

はじめに

前章では、ブラジルの都市近郊農村である福博村の現状を分析した。それに対し、本章では、僻地農村に当たるパラ州トメアスー移住地を対象とする。

トメアスー移住地については、1990年代前半に行われた調査研究がまとめられている（森 1995a, 1995b）。ここでは、トメアスーにおけるデカセギが、1世の女性を中心に担われており、その多くが病院の付添婦として働いていた様子が明らかにされている。しかし、これはあくまでトメアスーのデカセギが始まった1990年代初頭までの話である。その後のトメアスー移住地のデカセギの動向について、明らかにした研究は見られない。

ただし、梶田孝道らは、ブラジル人の移住過程を概観した上で、約10年でデカセギの主役が1世から3世へと交代する「凝縮された移住サイクル」が生じていると述べている（梶田・丹野・樋口 2005）。このようなデカセギの変化は、トメアスー移住地にも生じていることが予想される。そこで本章では、トメアスー移住地のデカセギの変化を一つの柱として、そのデカセギの実態と、デカセギがもたらした影響についてみていくことにしたい。

その際、変化を捉える上で、次の3つの観点を織り込みたい。第1に、トメアスー移住地の産業の変遷である。トメアスー移住地は、ピメンタと呼ばれる黒胡椒の一大産地として隆盛を極めた。しかし、その生産の多寡が、トメアスー移住地の人々の生活を大きく左右してきた。それは、当然、デカセギの動向にも影響を与えている。そこで、産業の変遷を中心に、トメアスー移住地の歴史と現状をまずは確認することにした（第1節）。その歴史のなかに、各段階のデカセギを位置づけていくことにする。

第2に、国の政策との関連である。ブラジルでは、経済的な危機の深刻化に伴い、1980年代後半に移民送出国となった（小内 2008:1-2）。ただし、その初期においてブラジル政府に基本的に見られたのは、移民はデカセギという一時的なものとの捉え方であった。しかし、ブラジル政府関係者への聞き取り調査を行ったイシは、近年、ブラジル政府における移民の位置づけが、デカセギから定住支援という方向に転換してきていることを明らかにしている（イシ 2008）。このような国家政策の変容が、デカセギの現状に与える影響についても見ていくことにしたい。

さらに第3に、福博村との比較分析である。前章で詳細に分析されたように、福博村では、その高邁な移住者精神は受け継がれつつも、産業の衰退や治安の悪化により、移住地コミュニティとしての展望は必ずしも明るくない。それに対して、トメアスー移住地はいかなる展望を持つのか。特に、デカセギがトメアスー移住地の将来に対して果たした役割に注目していく。

以上の3つの観点を分析に織り込みながら、以下のような順序でトメアスー移住地のデカセギの変遷を押さえていく。まず、上述のように、トメアスー移住地の歴史を概観する（第1節）。続いて、森（1995a）などの先行研究に見られた1世の女性によるデカセギを分析する（第2節）。ここでは、特にその効果を家族との関係を軸に見ていくことにする。その上で、1世の女性中心のデカセギ後の新たなデカセギの状況について検討する（第3節）。これは、いわばトメアスー移住地におけるデカセギの「第二局面」を描出することにつながる。そして、これらのデカセギがトメアスー

という地域社会にどのような影響を及ぼしたのかを見ていく（第4節）。ここでは、デカセギがトメアスーの生産と生活にいかなる関わりを持ったのかという視点から分析を進める。最後に、これら諸分析から浮かび上がったトメアスー移住地のデカセギの実像と、これが日系ブラジル人のデカセギ送出全体に対して持つインプリケーションを確認することにしたい。

第1節 トメアスー移住地の歴史と現状

第1項 トメアスー移住地の概況

トメアスー移住地は、アマゾン河口部に位置するパラ州の州都ベレンの南方約110kmに位置している。途中、グアマ（GUAMA）河をフェリーで渡らねばならず、約4～5時間を要する（森 1993:120; 山本・松本 1999:7）。トメアスー移住地の中心は、クワトロ・ボッカス（Quatro Bocas、「十字路」）である。ここは、経済領域の諸機関やさまざまな商店が集中している。クワトロ・ボッカスは、トメアスー移住地の中心であると同時に、トメアスー郡の生産面での中心地ともなっている（森 1995b:549）。トメアスー移住地に暮らす日系人は、約300世帯、1,500人である¹⁾。

第2項 トメアスー移住地とピメンタ栽培

トメアスー移住地の入植は、1929年に始まる。この移住地には、1929年から1936年までの8年間で、375の家族と41人の単身者が移住した（森 1993:121）。ただし、マラリアの蔓延など困難のなかでの開拓であったため、1942年までに96家族483人に減少した²⁾。

しかし、戦後の1953年から再びトメアスー移住地への入植がはじまり、この年から1966年までの間に、205の世帯と141人の単身者が、トメアスーでの生活を始めた（森 1993:121）。再び入植者がやってきた背景には、トメアスー移住地の中心作物であるピメンタの存在がある。

ピメンタは、「日本人によって発見されたアマゾニアの二大適性作物の一つ」とされ、その栽培に初めて成功したのがトメアスー移住地だとされる（蒲生 1978:125）。ピメンタを栽培する日系人は非常に潤い、ピメンタは「黒ダイヤ」とも称された³⁾。トメアスー総合農業協同組合（CAMTA）の結成が基盤となり、トメアスー移住地はピメンタの一大産地となった。

しかし、1960年代のはじめ、トメアスー移住地に危機が忍び寄ってきた。ピメンタの根腐れ病の発生である。1970年代にはトメアスー移住地の全域に広がり、5～6年で畑全体が枯れてしまった（山本・松本 1999:10）。また、1974年には大水害も発生した。ピメンタ1,000本当たりの収量は、2,410kg（1969年）→1,020kg（1974年）→810kg（1981年）と減った。そのため、トメアスー移住地は、ピメンタの病害対策とともに、多角的農業への転換が求められた。

具体的には、ピメンタとゴムの混植、またはピメンタと熱帯果樹の混植が行われた⁴⁾。また、マラクジャ、クプアスー、アセロラなどの作物も栽培されるようになった（山本・松本 1999:11）。これにより、トメアスー移住地はピメンタの単一栽培から、多角的農業へ転換したかに見えた。

しかし、ピメンタの国際価格はほぼ10年周期で変動している。たとえば、1トンあたりの平均価格は1,627ドル（1975年度）→2,212ドル（1977年度）→1,092ドル（1982年度）→4,935ドル（1987年度）と推移している（山本・松本 1999:13）。このように、ピメンタの栽培は投機性が高く、トメアスー移住地の人々の間では、「コショウはバクチ」といわれている⁵⁾。そのため、ピメンタの高値を予想して栽培面積を調整するなど、ピメンタ中心の農業経営は残存した（山本・松本 1999:12; 田中 1996:187）。しかし、1980年代末からピメンタの国際価格は一気に下落し、1992年には1トン

あたり870ドルとなった。この状況を打開するために、日本へのデカセギが始まった。

第3項 トメアスー移住地におけるデカセギ

トメアスーの住民がデカセギに向かった理由として森（1995b）は、第1に、1988年下半期にトメアスーの主産物であった胡椒の価格が暴落し、農業融資の利子返済が難しくなったこと、第2に、胡椒の単一栽培から多角化への転換を行う過渡的な状況の中で、現金収入を確保するために「デカセギ」が選択されたこと、第3に、トメアスーの電化プロジェクトの自己負担金が準備できない世帯があったこと、さらには、子弟教育のための学費準備、治安の悪化という要素も、「デカセギ」の促進条件になったということを描いている。こうした契機を経て、その後、「デカセギ」に行く人は急激に増加することになり、「トメ・アスーからの日本への出稼ぎは、1990年前後よりまさにひとつのブームを形成してきたといってよい」と評されるまでになったのである。

森（1995b）は、さらに、こうしたトメアスーからの「デカセギ」を、他の日系人集住地からの「デカセギ」と比較した上で、以下のように特徴づけている。

第1に、土地の切り売りでしのぐことのできない大規模農家以外の農家からデカセギがスタートしたことである。

第2に、トメアスーからの「デカセギ」においては、1世の割合が突出して多いというものである。トメアスーでは、戦後の1960年代以降も入植が行われており、こうした戦後移民の存在が、1世による「デカセギ」現象を生み出していたということが指摘されている。

そして第3は、トメアスーからの「デカセギ」に占める女性の割合が非常に高いという点である。こうした女性たちは、日本で、主に「付き添い家政婦」として働いていたとされる⁶⁾。

デカセギの実態をみると、1992年5月の時点で、農家あるいは兼業農家で約8割が占められるなか、デカセギに行っている者の比率はおおよそ3割である（表12-1）。これを2007年8月のデータとつきあわせてみると（表12-2）、1992年から15年間で60世帯254人がトメアスーを去っており、うち30世帯135人が土地を売って日本へ「引き揚げて」いる。また、2007年8月時点で日本へのデカセギ者リスト（全193世帯）のなかで、家族住所が「日本」と記載されている人々を確認すると、現在の生活本拠地が日本であるのは52世帯で、全体の26.9%に当たる（表12-3）。世代をみると、「事実上の移住者」と目される52世帯のデカセギ者の7割超が1世である。これらのデータから、トメアスーにおいては、デカセギで再生できた農家と、日本に引き揚げざるをえない農家とに両極化している傾向がうかがわれる。

トメアスー移住地におけるデカセギの内実をさらに掘り下げるため、現在もトメアスー移住地で生活する日系人のデカセギ経験を確認してみたい。この点をまとめた表12-4を見ると、3点が指摘できる。第1に、デカセギが始まったのは1980年代後半からであり、このときは妻や夫など親世代が中心であった。第2に、1990年代から子世代のデカセギが始まり、その多くは現在もデカセギに出ている。また、第3に1回あたりの期間は多様であり、1年程度のデカセギを繰り返していることがうかがわれるケース（たとえば、個人No. 72など）がいる一方で、10年以上デカセギが続いているケースもあった。

第4項 デカセギの受け皿としてのジュース工場

このようにデカセギが盛んであった1990年代初頭のトメアスー移住地の農業は、ピメント価格の低迷や多角化の後退が見られ、停滞していた（田中 1996:187-8）。これを打開するため、CAMTA

は熱帯果樹ジュース工場を拠点としたジュース生産事業に取り組むこととなった（森 1995b:572）。

このジュース工場の整備は、加工事業を進めるとともに、日本へと引き揚げようとするデカセギ者をトメアスー移住地にひきつけるため、デカセギ資金の投資先をつくるという役割もあった（森 1995b:573）。実際には、ジュース工場の生産はなかなか軌道に乗らなかった（田中 1996:188-9）。しかし、近年では、ポリフェノールが豊富であるということで人気が高まってきているアサイーの生産・加工・販売が軌道に乗り始め、ジュース工場では1日に20tの果汁を冷凍している。アサイーの価格は、数十倍に跳ね上がっており、ピメンタに代わる「黒いダイヤ」としてもてはやされている⁷⁾。

それでは、デカセギは、トメアスー移住地やトメアスーの人々にいかなる影響を与えたのか。以下の諸論考を通じて、この点の解明に取り組んでいきたい。

第5項 調査の概要

分析に先立って、トメアスー調査の概要を掲げておこう。本調査はデカセギから帰国した人々（デカセギ経験者）と現在デカセギ中あるいはデカセギから帰国した家族をもつ人々（留守家族）を対象としている。この条件に合致する該当者のうち承諾が得られた人々を対象者とし、インタビューや質問紙への回答を求めた。その結果、54名の方々から回答が得られた。これら対象者の基本属性は表12-4にまとめた通りである。

調査対象者は男性25人、女性29人と若干女性が多くなっている。年齢は、20歳代3人（5.8%）、30歳代9人（17.3%）、40歳代11人（21.2%）、50歳代8人（15.4%）、60歳代16人（30.8%）、70歳代5人（9.6%）となっており（不明2人）、平均年齢は51.8歳である。60歳代が最も多く、次いでその子世代に当たる40歳代が多くなっている。日系何世かについては、1世が27人（50.9%）、2世が17人（32.1%）、3世が7人（13.2%）、非日系が2人（3.8%）となっており（不明1人）、1世の多さが目立つ。おおむね50歳代以上は1・2世、40歳代以下は2・3世となっている。このなかには幼いころに一家そろって日本から入植したケースがそれなりに含まれており、比較的若い年代でも1世の者が多く見られる。

学歴を見ると、小学校3人（6.7%）、中学校（高等小学校を含む）15人（33.3%）、高校（中退を含む）18人（40.0%）、専門学校2人（4.4%）、大学6人（13.3%）、大学院1人（2.2%）であり（不明9人）、中学・高校で7割以上を占める。配偶者の状況では、未婚6人（11.5%）、既婚36人（69.2%）、離死別10人（19.2%）と、7割以上が有配偶の状況にある（不明2人）。

調査においては、デカセギに関する語りをもとに、日本へのデカセギをトメアスー側あるいはデカセギ者個人の側から見直し、そこに浮かび上がるデカセギ像をとらえることを課題とした。インタビューに際しては、日本語の質問紙とポルトガル語の質問紙の2種類を用意し、対象者が選択した質問紙を使用した。設問を双方で確認のうえ、対象者には、デカセギにまつわる家族、仕事、地域などについて自由に語るよう求めた。インタビューの録音は許可を得られた場合のみおこなわれた。

表12-1 1992年5月 移住地入植状況

	世帯数	家族人数	デカセギ世帯数	デカセギ数	デカセギ者数/家族人数
トメアスー地区	208世帯	972人	不明	309人	31.8%
第2トメアスー地区	58世帯	314人	46世帯	90人	28.7%

注) 現地で入手した「移住地入植状況一覧表」(1992年5月現在)より作成。

表12-2 1992年5月～2007年8月 世帯数・家族数増減状況

	日本移住世帯数 (家族人数)	ペレン転居世帯数 (家族人数)	その他移住・転居世帯数 (家族数)	1992年比 世帯数の増減	1992年比 家族数の増減
トメアスー地区	20 (90人)	20 (78人)	6 (21人)	マイナス 46世帯	マイナス 189人
第2トメアスー地区	10 (45人)	2 (7人)	2 (13人)	マイナス 14世帯	マイナス 65人

注) 1. 現地で入手した「移住地入植状況一覧表」(1992年5月現在)と2007年8月の調査時における取材データより作成。
2. その他の内訳は、トメアスー地区：ペレンと日本1、マナウス3、サンパウロ1、アメリカ1、
第2トメアスー地区：サンパウロ1、パラ州の他地区1となっている。

表12-3 家族住所が「日本」と記載されたデカセギ者 (2007年8月)

	世帯数	家族総数 (人)
1世 既婚 男性	28	102
1世 離別 男性	4	11
1世 離別 女性	1	1
1世 未亡人	5	16
2世 既婚 男性	5	14
2世 既婚 女性	2	5
2世 未亡人	1	3
3世 独身 女性	1	4
3世 既婚 男性	4	12
3世 既婚 女性	1	4
合計	52	172

注) 現地で入手した「日本へのデカセギ者リスト」(2007年8月)より作成。表中、「家族総数」とは、配偶者や子どもの生活本拠地が日本であるケースについて、配偶者の帯同有無・子どもの帯同数の記載があった分について集計を行ったものである。

表12-4 調査対象者の基本属性

家族 No.	個人 No.	続柄	年齢	性別	世代	学歴	結婚	居住 年数	デカセギ 開始	デカセギ 終了	デカセギ 回数	農地面積 (ha)
1	1	本人	42	女性	非日系	高校	既婚	不明	不明	不明	不明	不明
2	2	本人	30	男性	2世	高校	既婚	30	1999	2005	3	100
	3	妻	不明	女性	不明	不明	既婚	不明	2000	2005	1	
3	4	夫	66	男性	1世	大学	既婚	40	—	—	—	50
	5*	妻	54	女性	1世	中学	既婚	46	1989	1993	3	
	6	次男	35	男性	2世	高校	未婚	不明	1993	2005	4	
	7	三男	33	男性	2世	中学	既婚	不明	1997	2001	1	
7	8*	本人	64	女性	1世	小学	既婚	53	1987	1997	5	8
	9	夫	不明	男性	1世	不明	既婚	不明	1987	1997	5	
	10	長男	38	男性	2世	不明	不明	不明	1991	1992	1	
8	11*	本人	53	女性	1世	中学	死別	50	1994	2003	5	不明
9	12	本人	51	男性	2世	大学	離死別	51	1991	1993	1	200
	13	弟	不明	男性	2世	不明	不明	不明	1991	1993	1	
	14	弟	不明	男性	2世	不明	不明	不明	1989	継続中	2	
	15	妹	不明	女性	2世	不明	不明	不明	1990	継続中	2	
11	16	夫	不明	男性	不明	不明	既婚	不明	不明	不明	不明	75
	17*	本人	59	女性	1世	中学	既婚	51	1989	2004	6	
12	18	本人	29	女性	2世	高校	未婚	29	—	—	—	—
	19	父親	不明	男性	1世	不明	不明	不明	1994	継続中	3	
	20	弟	不明	男性	2世	不明	不明	不明	1995	継続中	3	
	21	兄	不明	男性	2世	不明	不明	不明	1989	不明	不明	
13	22*	本人	64	女性	2世	高校	既婚	36	1990	1995	3	170
	23	夫	不明	男性	不明	不明	不明	不明	1990	1993	2	
	24	長男	不明	男性	不明	不明	不明	不明	2004	継続中	2	
14	25	本人	33	女性	非日系	高校	既婚	33	1996	2006	1	—

15	26	夫	不明	男性	不明	不明	不明	不明	1996	2006	1	2
	27	本人	35	男性	3 世	高校	既婚	35	1990	1994	3	
	28	兄	不明	男性	3 世	不明	不明	不明	1990	継続中	5	
16	29	本人	43	男性	3 世	高校	既婚	43	1989	1999	2	25
	30	妻	不明	女性	不明	不明	不明	不明	1990	1999	2	
	31*	母親	64	女性	1 世	中学	既婚	49	1990	1997	3	
18	32	本人	43	男性	2 世	大学	既婚	43	—	—	—	不明
	33	妻	不明	女性	不明	不明	不明	不明	2006	継続中	1	
19	34*	本人	66	女性	1 世	不明	既婚	43	1988	1993	3	不明
20	35	本人	41	男性	2 世	不明	不明	41	1988	1997	3	不明
	36	母親	不明	女性	1 世	不明	不明	不明	1991	不明	2	
	37	妹	不明	女性	2 世	不明	不明	不明	不明	不明	2	
	38	妹	不明	女性	2 世	不明	不明	不明	不明	不明	2	
21	39*	本人	61	女性	2 世	中学	既婚	61	1991	1999	5	50
	40	次男	不明	男性	3 世	不明	既婚	不明	1991	継続中	3	
22	41*	本人	63	女性	1 世	不明	既婚	34	1996頃	1996頃	1	250
	42	夫	不明	男性	1 世	不明	不明	不明	1997	1998	1	
	43	長男	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	2006	継続中	1	
	44	次男	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	2000	継続中	1	
	45	四男	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	2007	継続中	1	
23	46	本人	41	男性	2 世	高校	既婚	41	1990	2000	2	400
	47	兄	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	1994	1995	1	
24	48	本人	77	男性	1 世	高小	既婚	44	—	—	—	490
	49	次男	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	2001	継続中	1	
	50	長女	不明	女性	2 世	不明	不明	不明	2004	継続中	1	
25	51*	本人	63	女性	1 世	中学	死別	46	1989	1996	1	52
	52	三女	40	女性	2 世	高校	未婚	40	1989	2004	4	
	53	長女	不明	女性	2 世	不明	不明	不明	2005	継続中	1	
	54	次女	不明	女性	2 世	不明	不明	不明	1989	継続中	不明	
	55	長男	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	1990	継続中	不明	
	56	次男	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	1990	継続中	不明	
27	57	本人	47	男性	1 世	中学	既婚	47	1990	1996	1	303
	58	弟	不明	男性	不明	不明	不明	不明	1988	継続中	不明	
	59	妹	不明	女性	不明	不明	不明	不明	1991	継続中	1	
28	60*	本人	69	女性	1 世	高校中退	既婚	53	1989	1990	1	100
	61	長男	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	1996	1998	1	
	62	次男	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	1989	継続中	1	
	63	長女	不明	女性	2 世	不明	不明	不明	1990	継続中	2	
	64	次女	不明	女性	2 世	不明	不明	不明	1989	継続中	1	
	65*	本人	65	女性	1 世	専門	既婚	37	1994	2002	8	
29	66	長男	37	男性	2 世	不明	不明	不明	不明	継続中	不明	75
	67	長女	35	女性	2 世	不明	不明	不明	不明	継続中	不明	
	68	次女	34	女性	2 世	不明	不明	不明	不明	継続中	不明	
	69	次男	32	男性	2 世	不明	不明	不明	不明	継続中	不明	
	70	三男	29	男性	2 世	不明	不明	不明	不明	継続中	不明	
	71	本人	72	男性	1 世	不明	既婚	53	—	—	—	
30	72*	妻	64	女性	1 世	小学	既婚	54	1990	1998	7	200
	73*	本人	70	女性	1 世	高校	死別	41	1990	1997	3	
32	74	次男	45	男性	2 世	不明	不明	不明	1991	継続中	3	175
	75	本人	39	女性	3 世	高校	既婚	1	1990	2006	3	
33	76	夫	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	不明	2006	不明	不明
	77	義母	不明	女性	1 世	不明	不明	不明	不明	継続中	不明	
	78	義姉	不明	女性	2 世	不明	不明	不明	不明	継続中	不明	
	79	義妹	不明	女性	2 世	不明	不明	不明	不明	継続中	不明	
	80	本人	67	男性	1 世	不明	不明	47	1994	1995	1	
34	81	妻	不明	女性	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	200
	82	長男	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	1990	継続中	2	
	83	次男	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	1990	1992	1	
	84	本人	70	男性	1 世	不明	既婚	45	—	—	—	
35	85	妻	70	女性	1 世	不明	不明	不明	1992	1997	1	不明
	86	長男	42	男性	2 世	不明	不明	不明	1992	継続中	2	
	87	本人	54	男性	1 世	高校	未婚	46	不明	不明	不明	
36	88	父親	不明	男性	1 世	不明	不明	不明	1990	2000	5	1100
	89	母親	不明	女性	1 世	不明	不明	不明	1990	2000	5	
37	90	本人	47	男性	3 世	大学	既婚	47	1989	1995	1	297. 5
	91	妻	不明	女性	不明	不明	不明	不明	1990	1995	1	297. 5
	92	兄	不明	男性	3 世	不明	不明	不明	不明	継続中	不明	297. 5
	93	弟	不明	男性	3 世	不明	不明	不明	1989	不明	不明	297. 5
	94	弟	不明	男性	3 世	不明	不明	不明	1989	継続中	不明	297. 5

39	95	弟	不明	男性	3 世	不明	不明	不明	1989	継続中	不明	—
	96	弟	不明	男性	3 世	不明	不明	不明	1989	継続中	不明	
	97	娘	43	女性	2 世	大学	未婚	43	—	—	—	
	98*	本人	65	女性	1 世	中学	死別	45	1989	1996	3	
	99	長男	40	男性	2 世	不明	不明	不明	1989	継続中	1	
41	100	次男	38	男性	2 世	不明	不明	不明	1991	継続中	4	52
	101*	本人	54	女性	1 世	中学	既婚	52	1991	2000	4	
	102*	母親	75	女性	1 世	高校	死別	52	1990	1991	1	
	103	次男	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	1998	継続中	不明	
42	104	長女	不明	女性	2 世	不明	不明	不明	1999	継続中	不明	—
	105	本人	32	男性	2 世	大学院	未婚	32	1997	1999	1	
	106	父親	不明	男性	1 世	不明	不明	不明	1987	2006	4	
	107	兄	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	1991	2005	5	
	108	義姉	27	女性	2 世	高校	既婚	27	2000	2005	2	
44	109	妹	不明	女性	2 世	不明	不明	不明	2001	継続中	2	—
	110	本人	27	女性	2 世	中学	離死別	27	1998	2007	2	
	111	母親	不明	女性	1 世	不明	不明	不明	1989	継続中	不明	
	112	兄	30	男性	2 世	不明	不明	不明	1996	継続中	3	
45	113	妹	26	女性	2 世	不明	不明	不明	2000	2006	1	不明
	114	本人	41	男性	2 世	専門	既婚	41	1989	1995	1	
	115	弟	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	1989	継続中	不明	
46	116	本人	43	男性	2 世	大学	離死別	43	2003	2007	1	100
	117	母親	不明	女性	不明	不明	不明	不明	不明	不明	4	
47	118*	本人	62	女性	1 世	小学	死別	52	1984	1999	1	19
	119	夫	物故	男性	2 世	不明	不明	不明	1988	1988	1	
	120	長男	31	男性	2 世	不明	不明	不明	1996	不明	1	
	121	長女	42	女性	2 世	不明	不明	不明	1984	不明	1	
	122	次女	40	女性	2 世	不明	不明	不明	1988	不明	1	
	123	三女	39	女性	2 世	不明	不明	不明	1989	不明		
48	124	本人	32	男性	3 世	中学	既婚	32	1991	2006	4	7
50	125	本人	35	女性	2 世	高校	離死別	35	1994	1998	1	—
	126*	母親	65	女性	1 世	中学	既婚	53	1992	1994	1	
	127	兄	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	1989	1991	1	
	128	兄	不明	男性	2 世	不明	不明	不明	2002	継続中	1	
51	129	本人	59	女性	1 世	不明	既婚	51	1989	不明	5	75
	130	夫	57	男性	3 世	中学	既婚	57	1998	2000	1	
	131	長男	33	男性	2 世	不明	不明	不明	不明	継続中	不明	
	132	次男	31	男性	2 世	不明	不明	不明	不明	継続中	不明	
	133	三男	30	男性	2 世	不明	不明	不明	不明	継続中	不明	
	134	四男	28	男性	2 世	不明	不明	不明	不明	継続中	不明	
53	135*	本人	64	女性	1 世	高校	既婚	38	1989	2003	不明	70
	136	夫	不明	男性	1 世	不明	既婚	38	1999	2003	不明	
	137	長女	37	女性	2 世	大学	不明	不明	不明	不明	不明	
	138	長男	35	男性	2 世	大学	不明	不明	不明	不明	不明	
	139	次男	33	男性	2 世	高校	不明	不明	不明	継続中	不明	
	140	次女	31	女性	2 世	大学	不明	不明	不明	不明	不明	

注) 1. 「個人No。」に*を付している者は、第2節の分析対象者。

2. 実際に聞き取り調査を行ったのは、「続柄」が「本人」となっている者に加え、個人No.4, 5, 6, 7, 16, 31, 52, 72, 97, 102, 108, 126, 130, 136 の合計54名である。

質問紙の内容は次のようになっている。まず、デカセギ経験者に対しては、デカセギに行くまでの経緯、デカセギの回数・期間・職種・収入の他、ブラジルへの送金、日本での生活についての不満や満足度、帰国意志、日本への好感度の変化などを、具体的なエピソードを含めて問うている。併せて、ブラジルの留守家族との連絡の手段・頻度、留守家族について心配だったこともたずねている。帰国後の仕事や生活については、デカセギの成果、現在の就業状況を問い、最後に、再デカセギの意志とそのように考える理由、デカセギ希望者へのアドバイスなどを求めるという構成になっている。

一方、留守家族に対しては、はじめに、デカセギ者がデカセギに行くまでの事情とデカセギへの賛否をたずね、それをふまえて、デカセギ者からの送金の有無、日本への好感度、家族や周囲の人々のデカセギ観など、現在の留守家族の生活状況に関する質問をしている。デカセギ者との関係につ

いては、連絡の手段・頻度、デカセギ者と留守家族に関わって心配されていることを確認し、さらに、デカセギ者の子どもが留守家族に託されている場合には、その子どもの学業や将来への関心・悩み・期待を問うている。最後に、デカセギ者の帰国後の仕事や再デカセギの可能性にまつわる思いや期待、留守家族としての経験からもたらされるアドバイスなどをたずねている。

第2節 トメアスーの「付添婦デカセギ」——デカセギの第一局面

第1項 中高年既婚女性のデカセギ

第2節では、トメアスーにおける日系ブラジル人のデカセギのうち、その第一局面ともいえる1990年代を中心とする中高年既婚女性のデカセギブームに着目し、彼女たちのデカセギの実態を、デカセギと家族関係の相関に注目しながら考察する。

この「中高年既婚女性のデカセギ」はトメアスーのデカセギ史の特色のひとつとして知られている（石川 1995; 森 1995a; 森 1995b）。これらの先行研究によると、1世の妻たちによるデカセギはトメアスーの農業経営に大いに役立ったといわれる。しかし、そこでの関心の中心は、デカセギがトメアスーの地域社会にもたらす影響と意義にあった。従って、女性のデカセギについても、その稼ぎが地域社会や地域経済にもたらした効果に主に注目するのであり、家族関係という文脈にデカセギ者としての彼女たちを位置づけるという視点はなかったといつてよい。

そこで、本節では、彼女たちの経済的貢献が大きなものであったことをふまえたうえで、さらに、これまで外側から客観的に評価されてきた女性のデカセギを、デカセギ当事者自身の語りからあらためて捉えなおしていく⁸⁾。一家の主婦であり母親である女性のデカセギが家族関係にもたらしたものを明らかにすることは、即ち、現在のデカセギ者である2世、3世がそこで育ち、今も支えられている家族的基盤、家族的環境の一端を知ることでもあり、デカセギをめぐるトメアスーの風土を理解することにもつながると思われる。

第2項 対象者像

今回の調査対象者54人のうち、「1990年代を中心とする中高年既婚女性のデカセギブーム時にデカセギをしていた女性」という条件に該当する者は20人である。この20人とは、前掲表12-4中、*付きの個人No.で示した人々である。彼女たちの家族構成やデカセギ状況は表12-5の通りである。これらの表をもとに彼女たちのイメージを描写すると次のようになる。

まず、年代をみると、50代が4人、60代が14人、70代が2人であり、60代が多数を占めている。世代としては1世が中心（1世が18人、2世が2人）で、夫が健在である者14人に対して死別した者は6人である。トメアスーで長く農業を営み、半数である10人が50年以上をここで過ごしている。あとの10人も、50年超とまではいかないが、30～39年在住が4人、40～49年在住が6人おり、いずれも長期にわたるトメアスー居住者であった。学歴を整理すると、小学校中退が1人、小学校卒が2人、中学校卒が10人、高校（日本の高校含む）が3人、その他2人、不明2人となる。中学校卒が最多であるが、1世の場合、日本で高校以上の教育を受けているケースもわずかながらみられた（個人No.65, 73, 102, 135）。

デカセギ状況を概観すると、家族のなかで最初にデカセギに行ったのが彼女たちであるケースが多いことがわかる。ほとんどが単身のデカセギで、1～2年毎に帰国とデカセギを繰り返していた。子ども世代のデカセギが家族帯同で長期化していることとは対照的である。デカセギをしていたの

は、彼女たちが40～50代前半だった頃で、現在は、デカセギをやめて数年から十数年経った時点である。子ども世代も今や30～40代となり、彼女たちは祖母となり、15人は子どもをデカセギに送り出す立場になっている。今は、夫婦ふたり、あるいは、子どもや子ども夫婦と共に農業を営む。前節で述べられているように、トメアスーではデカセギで再生できた農家と日本に引き揚げざるをえない農家とに両極化する傾向がみられるなかで、これらの女性たちは、トメアスーにとどまることのできた人々ということができる。1990年代に中高年既婚女性としてデカセギをしていた20人とは、このような人々であった。

以下においては、まず、デカセギの意思決定までのプロセス、即ち、女性たちによるデカセギの意味づけとその背後にある考えや思いを考察する。次いで、滞日生活を概観し、留守家族とのつながりをとらえる。続いて、帰国の契機と帰国後の生活を追い、デカセギの成果を整理する。最後に、トメアスーにおける女性のデカセギと家族関係の相関についてまとめて締めくくりとする。

第3項 デカセギの意思決定まで

(1) 女性たちはデカセギの理由をどう語るか

女性たちの語りにおいては、デカセギのきっかけ・理由としては「みんな行っただから」という主旨のものが突出して多い。当時の既婚女性のデカセギブームを思わせる。次いで、「お金になるから」、「教育費が要るから」など資金の必要性があげられているが、「農業資金を稼ぎに行く」と語られている例は極めてわずかしみられない。客観的にみて、デカセギ要因が農業経営の不調（ピメンタ価格が低迷していたこと、熱帯果樹への転換がまだ軌道に乗っていなかったこと）であることは疑いないにもかかわらず、デカセギ女性たちの発言において農業経営への言及は少なく、さらにその言及内容においても、何がどのように不振であり、何のための資金が必要だったのかが具体的に語られることはほとんどなかった。

彼女たちが農業資金の必要性について語らなかったことについて、考えられる理由は2つある。ひとつは、農業経営の危機を認めることを望まなかったということである。大志を抱いて日本からブラジルへ移民し、安定した中流以上の暮らしを確立した者として、農業が傾きかけて日本にデカセギに行くというストーリーは屈辱的であり、それを容易に認めることは難しかったのではないだろうか。

もうひとつの理由は、農業は男の仕事、家事と育児は女性の仕事という性別役割分業規範が強く機能していたということである。一般に農業経営の中心は夫である。妻が農作業を分担していたとしても、夫と同程度に経営状況を把握していたとは考えにくく、それゆえ適切な発言はできなかった、あるいは、発言が控えられていたとみることもできる。一方、子育ては女性の領域の仕事であり、なかでも母親の教育責任は重い。デカセギ時、子どもの多くは就学中であった。教育投資は、それが必要な時期、期間、金額がある程度確定的であり、獲得された学歴のもつ効果も確実視されていた。農業投資に比べればリスクが低いと考えられていたのである。

(2) 子どもの教育達成への期待

これまで日系人は教育熱心といわれてきたが、トメアスーの女性たちも例外ではなかった。子どもの教育達成と社会的成功への期待をみると、成功の要因として「努力」が最も多くあげられ、大学以上の進学を望んでいた者が7割に迫る。デカセギ女性たちが子育てにおいて心がけたことは、「ブラジル人と同じにならないように」と「労働者階級と同じにならないように」ということであっ

た。これは、自分の農地で働く下層のブラジル人労働者を念頭においた発言である。

ただし、彼女たちが子どもの教育に熱心だったのは、農業の後継者になることを期待してのものではない。「高齢化」、「気候の変化。生産物の値段が安い。労働問題が難しくなってきた」など、トメアスー農業が前途多難であることは明白であり、後継への期待があっても、それは明言されず、子世代の自主的な選択に委ねられていた。つまり、大学へ進学させること、学歴を獲得させることにこそ象徴的な意味があり、日系エリート矜持として重大な意味をもっていたのではないと思われる。

従って、母親たちは、早くから教育環境の整ったところに子どもを送り出し、より上質の教育を受けさせようと努めた。主な教育地はベレンであり、当時は、中学あるいは高校からベレンの学校に進学させることが珍しくなかった。ベレン進学が多数を占めるなか、6人の子どもをサンパウロに進学させたというケース（個人No.22）もある。大学ともなると進学地はもう少し多様になり、サンパウロ進学者も増えている。このように、複数の子どもが10代初めあるいは半ばからトメアスー以外で就学するとなると、教育費は高額となる。従って、就学時期の子どもをもつデカセギ女性にとっては教育費の捻出が差し迫った問題となったのである。

第4項 期間限定の滞日生活

(1) 付添婦という仕事

こうして、お金のために、特に子どもの教育費のために、多くの母親たちがデカセギに赴いた。日本での最長職でいちばん多かったのが病院の付添婦である。日本語を話せるという他に特技をもつわけでもなく、専門教育を受けているわけでもない中高年女性にとって、この職業は、高い収入（30～60万円）が得られる貴重な機会だった。同行する仲間や斡旋業者の存在もまたこの流れを加速させた。農業経営のためには男性（夫）がブラジルに残らなければならないという事情により、彼女たちは基本的には単身で日本に行っているが、同郷者あるいは他の州の出身者と一緒に病院に隣接した寮やアパートをあてがわれることも多く、まったく孤独な状況におかれていたわけではなかった。

付添婦は、病院にほぼ24時間拘束され、日本人同僚や看護師などとの関係において対立や葛藤を抱えつつ仕事に励むという日々を過ごしていた⁹⁾。彼女たちの日常生活は病院というきわめて狭い世界のなかでほぼ完結しており、日本社会や日本人全般の印象についても、勤務先の病院における上司、同僚、患者、患者家族との関わりの中から形成されざるを得ず、結局は、日本に対する失望が蓄積されていった。ただし、それで日本が嫌いになったというわけではない。治安がよく、ものが豊かで、便利であることなど生活の快適さについてはこれらを高く評価する者は多く、人間関係以外についての日本の印象は決して悪くはない。

これは、彼女たちが自身をあくまでも短期のデカセギ者と認識していたからではなかろうか。多くの場合において、2年以内での単身の行き来が繰り返されており、デカセギ女性たちは、自分を日本人と（あるいは、自分のルーツは日本であると）認識しつつも、ブラジルに家族がおり、生活の本拠地があり、帰る場所としての愛着を感じている。自分が妻であり、母親であるとの認識が常にあり、軸足はしっかりとブラジルに据えられていたといえる。だからこそ、自身のデカセギをお金のための期間限定の滞日であると定め、高給の付添婦を志願したのである。そうした状況において、デカセギ者を支えたのはブラジルの留守家族とのつながりであった。

(2) 留守家族とのつながり

デカセギ女性は一家の主婦であった。妻であり、母親であり、同居する親世代にとっては、娘であり、嫁であった。つまり、日常的に家族の健康管理と子育てを主に担う立場にあったのであり、それゆえデカセギ先においても、彼女たちは、夫の健康、子どもの教育・健康、親世代の健康についての気づかいをみせる。家計を心配する者がわずかしかなかったことは、農家経営全体に関わる問題はブラジルに残る夫がうまく取り仕切っていることを前提に、自らは主婦あるいは母親という立場から留守家族を気づかうという役割分担的発想を示しているといえるだろう。

留守家族に対して上のような心配をしながら、彼女たちは、1～2週間に1度くらいの頻度で電話をし、手紙を書き、最も大事な務めである送金を定期的あるいは不定期におこなっていた。ただし、送金をしていたとはいえ、多くの場合、ブラジルでは夫が農業を続けていたのであり、デカセギ女性たちが主たる家計担当者たることを正式に求められていたわけではなかった。つまり、彼女たちとしては、ブラジルではありえないほどの高給を日本で受け取っていたとしても、自分がブレッドウィナーであるとの認識は少なかったのではないかと思われる。例えば、自分のデカセギ中、夫が農業を休んで自分のデカセギ収入に頼っていたことについて、ある妻は「男の人は弱い」（個人No.118）と批判的に語っている。

このように、デカセギ女性たちは、デカセギ中であっても、基本的には、自分が主婦であり、妻であり、母親であるという性別役割分業の枠組みにそって思考し行動していたように思われる。だからこそ、必要なお金を稼いでブラジルに帰ることは当然であり、滞日を楽しむことはあっても、日本にずっと住むことは考えの外であった。よって、帰国の意志については、「何があっても帰国」「お金が貯まったら帰国」との回答が圧倒的に多くなっている。

第5項 帰国

(1) 再デカセギ

その後、付添看護の保険外負担の増加、紹介業者による中間搾取的な扱い、家政婦が介護に関する研修を受けていないことなどが問題となり、付添看護は1994年に廃止が決定され、これにより状況は一変する。これまで、デカセギは、周囲の人々からもその稼ぎの大ききゆえに注目され、戸籍の売買や養子縁組をしてまで日本をめざす人々を生み出してきたが、これ以降トメアスーの中老年既婚女性のデカセギブームは終息に向かう。

帰国後、ほとんどの女性がトメアスーへの愛着を語っている。30年以上住み慣れた土地であることがその大きな理由であろうが、それだけではなく、日本でのデカセギ生活の経験、とりわけ「外人」への差別的な処遇によって、日系ブラジル人としての自己意識が高まったためと思われる。デカセギ女性たちは、ブラジル人や労働者階級の人々との関わりを好まず、「日系コロニア」を好むのであり、1人を除く19人がトメアスーの暮らしやすさを評価し、将来も住み続けたいと回答している。

このようにトメアスーでの生活をあらためて高く評価すると同時に、再デカセギについては、年齢が高いので行きたくないと回答する者が9割近くを占める。付添婦のような高給の仕事がないこと、職場で差別的な扱いを受けてまで働きたくないことも再デカセギを押しとどめる大きな要因となっている。そうした選択が可能なのはデカセギせずとも暮らしていける経済階層だからであり、今はむしろ、デカセギ者の母親としてトメアスーに留まり、子どものデカセギを支え、子どもの帰

国を待つことに、より大きな関心がもたれている。

(2) 若いデカセギ世代の支え手

子世代をデカセギに送り出している留守世帯の15人についてみると、子世代にとってのデカセギは母世代のそれとはかなり異なったものとなっている。即ち、母世代のデカセギが、中年期で、既婚単身の帰国前提、従って期間限定のものであったのに対して、その子世代のデカセギは、より若い時期に開始され、家族帯同で長期化しているのである。その背景には相変わらず脆弱なブラジル経済がある。女性たちが子どもにより高い教育を与えようとデカセギまでしたにもかかわらず、結局のところ、子どもはその教育に見合った職業になかなか就けないのが現実である。従って、子どものデカセギへの賛否をみると、デカセギに行くのを理解し応援する、という態度が多い。

しかし、積極的に賛成というわけではなく、デカセギ希望者に対しては、「デカセギせずに生活が成り立つのであればブラジルにとどまること」「家族とはできるだけ離れないこと」の2点を強く勧めている。家族帯同のデカセギは精神的に落ち着き、それはデカセギ者にとってはいいことである。しかし、滞日期間が長期化すれば、子どもの教育問題も複雑化する。また、土地を放置していけば、帰国後すぐに農業を再開することはできない。若い世代のデカセギが農業の放棄や家族の崩壊を進めるとして、彼女たちは強い危機感をもっている。

こうした状況下、母親が当てにされるとすれば、それは孫の養育者としてである。祖母であるデカセギ女性たちが、子ども夫婦のデカセギ期間、ブラジルで孫を預かり養育するというのが一般的だが、なかには、祖母が日本で孫の面倒をみるという例（個人No.118）もある。「主人だけおいて妻が子守に呼ばれる」という出張型の子守が今後増えていく可能性もあるだろう。

第6項 デカセギで得たもの

さて、女性たちはデカセギで何を得たのか、あるいは、何を得たと思っているのだろうか。1つめは、お金という経済的な成果、2つめは、女性の自立向上という成果、3つめは、高齢者介護の技術習得という実践的な成果である。彼女たちは、これらのうちのひとつ、あるいは複数を獲得したと回答している。

まず、1つめの経済的な成果をみてみよう。圧倒的多数が付添婦として高給を稼ぎだし、階級の変化を伴うほどではなかったにせよ、留守家族の生活や農業のために多大な貢献をしたことがわかる。お金の具体的な使い道をみると、子どもの教育費と農業資金（機械設備も含む）が最も多い。その他、住宅・不動産資金（新築、改築、ローン、土地）、車購入資金、旅行費と続く。

興味深いのは、この女性たちに起業願望がみられないことである。当時のトメアスー農業は女性のデカセギによって救われたといわれているが、それは妻の稼ぎを夫が農業に投下できたからである。これは、彼女たちが自分の収入をサイドラインと認識し、家計についての判断をブレッドウィナーたる夫に委ねていたからである。ただし、ある女性が「ドルを畑に埋めてしまったという感じ。戻りが無い。みんな埋めてしまって」（個人No.39）と語るように、デカセギ女性たちすべてが、夫の判断、即ち「妻の稼ぎを農業につぎ込むこと」に賛同し満足していたわけではなかった点に注目したい。

続く2つめの女性の自立向上の成果とは、つらい仕事や「外人」への差別的処遇に耐えた経験、留守家族の生活や農業経営に経済的に貢献した実績が、デカセギ女性たちに自信や積極性をもたらしたということである。なかでも、経済的負担を引き受けたことは彼女たちに大きな自信を与えた

と考えられる。そして、結果的に、家庭内のジェンダー関係もそこから影響を受けて変容の兆しをみせている。例えば、「昔は女性には夫に依存していた。日本から戻ってからは、女が男（夫）に対して発言権が増した。お金を持ってきたから」（個人No.22）という発言があった。これは、デカセギによって女性の自立が一步前進したことをうかがわせる印象的な一言である。ここから、デカセギが夫とより対等な関係に近づく契機となったことが読み取れる。

3つめの高齢者介護の技術習得という実践的な成果とは、付添婦として働いた場合に限定されるが、その職業上の経験が家庭での介護（親世代や夫）に役立つことが期待されることである。付添婦という仕事に就いたことで偶然得られた技術ではあるが、主婦には家族を看病・介護することが期待される以上、存外嬉しい副産物として受け取られていた。

第7項 おわりに

最後に、このデカセギと家族関係の相関についてまとめておこう。デカセギでお金を稼いだことは女性たちに自信をもたらし、デカセギで稼いだ資金の使途や管理をめぐるのは主体性の芽ばえがみられた。デカセギが、夫への依存を脱し、夫に対する妻の発言権を増大させる契機となっていたといえる。これは、デカセギが性別役割分業規範の揺らぎをもたらしたということである。

しかし、その一方で、収入の高さや貢献度の大きさにもかかわらず、女性たちは自分の収入をサイドラインとして認識していたと推察される。つまり、彼女たちにとって、ブレッドウィナーはあくまでも夫であったと考えられる。対象者の年代を考えれば、彼女たち自身が性別役割分業規範にそったしつけや教育を受けて育ってきたことは想像に難くない。そして、農家の主婦としての生活もこの規範の下で営まれてきたと思われる。女性たちの多くが就いた「付添婦」という職業も、その仕事の内容をみると、性別役割分業の規範に対して実に適合的であった。病人や老人の介護は、家庭においては主婦の仕事とされる類のものである。それゆえ、デカセギ先で介護技術を身につけることは結果として主婦としての力量を上げることとなる。であるからこそ、付添婦としていかに有能であっても、いかに高給を稼ぎだしたとしても、それは妻の領域を逸脱することにはならず、夫の領域を侵犯しプライドを傷つけることにもならなかった。

結局、彼女たちにとってのデカセギは、いってみれば、「国境を越えた主婦のパート」だったということであり、稼いだ額の大きさゆえに感謝されこそすれ、それは、女性（妻、主婦、母親）としての枠内での自立の向上をもたらすにとどまったといわざるをえない。ただし、女性という枠内での自立とは、見方を変えるならば、性別役割分業の規範を守りながらも、実態としての発言権を身につけていく過程といえる。その意味で、トメアスーにおける中高年既婚女性のデカセギは、限定的ながらも、夫婦の権力関係に少なからぬ影響を与えるものであったといえることができるだろう。

以上、1990年代を中心とする中高年既婚女性のデカセギについて考察した。次節では、2世、3世による現在まさに進行中のデカセギについて取り上げる。

表12-5 家族構成、家族成員のデカセギ経験、子どもの居住地など

個人 番号	種類	現在の同居家族 (子どもの数・性別・年齢)	家族成員のデカセギ経験 本人以外のデカセギ者については、[帰] は帰国、それ以外はデカセギ中。未婚、単身(既婚単身)・帯同(家族帯同)の別はデカセギ時。ただし、デカセギ途中で結婚した場合を含む。 家族のなかで初めてのデカセギ者には★	現在デカセギしていない別居の子どもの居住地・職業、既婚/未婚の別、など
5	デカセギ者	本人=妻、夫、次男 (息子4)	★本人(単身):1989～1990, 1991～1991, 1993～1993, 東京 長男[帰](帯同):1997～2001 次男[帰](未婚):1993～2005に4回、栃木で建設・土木関係 三男[帰](未婚→配偶者帯同→単身):1994～2006に3回、型枠をとる仕事や道路工事	長男はベレンで駄菓子の卸業、三男はトメアスーでカラオケルームなど自営。四男はマナウスでサラリーマン
8	デカセギ者	本人=妻、夫、長男夫婦 (長女42次女41長男38)	★本人:1987～1997に5回、夫と同じ会社。名古屋の紡績会社 ★夫[帰]:1987～1997に5回 長男[帰]:1991～1992、車の部品の加工・組み立て	次女はベレンの病院で看護師
11	デカセギ者 留守家族	本人=妻、実母 夫は2005死去 (息子1娘3)	本人:1994～1995, 1995～2003に5回、1, 2回目は単身、3～5回目は帯同 ★夫:1991～2002に5回 長男:17歳から日本、栃木 長女:1997～現在、栃木で会社員 次女:中学2年で日本へ。栃木で会社員 三女:静岡の御殿場で主婦	
17	デカセギ者 留守家族	本人=妻、夫 (長男33次男31三男30四男28)	★本人(単身):1989～1990, 1991～2004に計6回。滋賀県、東京 夫[帰]:1998～2000、瓦会社など 長男(帯同):愛知 次男(帯同)と三男は浜松、四男は川崎	
22	デカセギ者 留守家族	本人=妻、夫 (息子1娘1)	本人(単身):1990～1991, 1992～1993, 1994～1995の3回 ★夫:1990～1991, 1992～1993の2回 長男:2004～現在、長野県。2006に一時帰国	長女はサンパウロで医師
31	デカセギ者	本人=妻、夫、長男43、長男妻、孫3 (息子2娘1)	本人(単身):1990～1991, 1992～1993, 1996～1997、東京 ★長男[帰]:1989～1992豊橋の自動車工場から鉄工会社へ。1996～1999土岐市のテレビ部品製造 長男妻[帰]:1990～1991, 1997～1999 夫[帰]と娘[帰]もデカセギ経験あり	次男と長女はブラジル
34	デカセギ者	本人=妻、夫 (長男42長女33)	★本人(単身):1988～1989, 1990～1991, 1992～1993の3回	長男はアメリカで牧師、長女はベレン大医学部を卒業後、筑波大学医学部に留学中
39	デカセギ者 留守家族	本人=妻、夫、長女26 (息子2娘1)	★本人(単身):1991～1992, 1993～1993, 1995～1996, 1996～1997, 1998～1999、東京 長女[帰](未婚):2004～2006、日本で研修 次男(未婚→帯同):1991に6ヶ月、2回目は5年位いて1998に帰国。今は3回目、来年4月で2年。川崎のいすゞなど	長男はベレンのアマゾン銀行本店、長女はトメアスー市役所で会計士。長男は既婚(孫1)、次男は日本で結婚(孫2)、長女は未婚
41	デカセギ者 留守家族	本人=妻、夫、 (息子5娘1)	★本人(単身):夫のデカセギの前に1回半年間ほど、東京 夫[帰](単身):10年位前に1年ほど、熊本のプラスチック工場 長男:2006～現在、千葉。友人と経営する会社の資金づくりのため 次男:2000～現在、自動車部品会社 四男:日本で試験を受け奨学金を得て2005～2007家具作りの研修、いったん帰国後、開業資金づくりのために再び日本へ	三男は農業の跡取りでCAMITA勤務(既婚)。長女は新聞社勤務、在サンパウロで既婚。五男はウスビ在学中、在サンパウロ
51	デカセギ者 留守家族	本人=妻、三女、孫2(長女の子) (息子2娘3)	本人(三女と):1989～1996、東京 長女(夫と):2005～現在、滋賀県 ★次女(帯同):1989～現在、埼玉県 三女[帰](未婚):1989～1992, 1993～1995, 1996～2004 長男(帯同):1990～現在、岐阜 次男(帯同):1990～現在、岐阜	
60	デカセギ者 留守家族	本人=妻、夫 (息子3娘2)	★本人(次男、次女と):1989～1990 長男[帰]:1996～1998 ★次男(単身):1989～現在 長女(帯同):1990～現在、1994に一時帰国、2005に日本で結婚して埼玉在住 ★次女(帯同):1989～現在、2000に一時帰国、日本で結婚して四日市在住(日本に帰化) 2007出産休暇で帰国	長男は農場を継ぎ、三男はガソリンスタンド。次男の家族はサンパウロ

65	デカセギ者 留守家族	本人＝妻、夫 (長男37長女35次 女34次男32三男29)	本人(単身):1994～2002に8回。10ヶ月働いて2ヶ月帰国のサイ クル ★長男(帯同):鹿児島県の県費留学生として農業試験場へ。その後 工場勤務、京都、埼玉 長女(帯同):東京の水産試験場で熱帯魚の研修1年。帰国後再び 日本へ 次男(帯同):埼玉 三男(未婚):自分でトラックを購入しプレハブ資材の調達・組み 立て 次女もデカセギ経験あり	次女はマラバ在住。 レストラン経営
72	デカセギ者	本人＝妻、夫 (息子1長女42次 女38)	★本人(単身):1990～1998に8回位、1年行って2ヶ月帰国とい うサイクル	長男は電気関係の サラリーマンで在 ベレン。長女と次 女は結婚して在サ ンパウロ
73	デカセギ者 留守家族	本人＝妻 (長男47次男45)	★本人(単身):1990～1991, 1991～1993, 1995～1997 次男(帯同):1991～現在、2004より人材派遣会社を経営、日本人 夫婦と養子縁組、3回ほど帰国	長男はJICAベレ ン支部を経て、マ ナウスの自動車会 社
98	デカセギ者 留守家族	本人＝妻、長女 (息子2娘1)	★本人(1, 3回目単身、2回目夫と) :1989～1991, 1991～1993, 1994～1996 夫(妻と):1991～1993、工場 ★長男(帯同→離別):1989～現在、横浜、茅ヶ崎、平塚、深谷、 土浦 次男(帯同):1991～現在、栃木那須塩原	長女は幼稚園、文 協日本語学校勤務 未婚
101 102	デカセギ者 留守家族	本人＝妻＝101母＝ 102 101の夫 (息子2娘1)	本人(単身):1991～1991, 1993～1995, 1995～1997, 1997～2000、 東京、山梨、八王子など ★母(単身):1990～1991、東京 長女:1999～現在、埼玉のゴルフ場 次男:1998～現在、埼玉、プレハブ運搬・組み立て	長男は銀行勤務、 在トメアスー
118	デカセギ者 留守家族	本人＝妻 (長女42次女40三 女39長男31)	★本人(1回目は長女と。以降は単身):1984～1999に7回 夫:1988～1988の半年間が1回 長男:1996～現在。2000, 2006に一時帰国 ★長女(帯同、孫2):1984～現在。最初は愛知県の自動車部品工場 次女(帯同、孫2):1988～現在 三女(帯同、孫2):1989～現在 子ども4人とその配偶者4人がすべて同じ会社(Kゴム)で働く	
126	デカセギ者 留守家族	本人＝妻、夫、孫 3(長男の子) (長男41次男は亡 くなった。長女35)	★本人(単身):1992～1994、名古屋に3ヶ月、その後東京 長男(妻と):1992～1994、日本の農大に留学し帰国。その後デカ セギへ。妻は5年前から日本 長女[帰]:1994～1998、日本の短大に県費留学期、長野県や愛知県 で働く	長女はトメアスー
135	デカセギ者 留守家族	本人＝妻、夫 (長女37長男35次 男33次女31)	★本人(単身、一時期夫帯同):1989～2003、毎年帰国した 夫(妻と):1999～2003、うち2年間伊豆のホテル 長男[帰]:は大学が終わってから1年ほど。トヨタ関係 長女[帰]:1年ほど仲居 次女[帰]:1年ほど仲居 次男:農業高校出てデカセギ、浜松	長男は大学の電気 科卒業しクリチー パでサラリーマン、 長女は大学でリハ ビリを学びサンパ ウロで開業、次女 は医学部を出てア カラで開業

第3節 ブラジル農村部から日本への「デカセギ」——デカセギの第二局面

第1項 はじめに

第2節で見たような1世の女性による「デカセギ」ブームが終焉を迎えると、トメアスーにおける「デカセギ」の中心的な担い手は、2世・3世へと移り変わった。こうした2世・3世による「デカセギ」が、現在の日本における「ブラジル人労働者」像を形成してきたと言えるだろう。

こうした「ブラジル人労働者」の増加は、マジョリティである「日本人」たちに大きなインパクトを与えた。研究者は、「ブラジル人」と「日本人」との関係性のあり方を記述しようとし、行政組織の担当者は、「ブラジル人」と「日本人」との「共生」をいかに実現するかということに取り組んできた。

しかしながら、ここに一つの陥穽が存在する。こうした「ブラジル人」と「日本人」との間の関係性を考察し、それを記述するという作業や認識枠組み自体が、「ブラジル人」・「日本人」という

2分法を強化し、再生産しているという可能性を、決して否定できないのである。実際、わたしたちが「ブラジル人」について語るとき、特定の「ブラジル人」像だけを前提にする場合が少なくない。例えば、「デカセギ」、「滞在の長期化」、「リピーター」といったキーワードを並べるだけで、容易にある「ブラジル人」を想定することができるだろう。

本節では、ブラジル・パラ州のトメアスーで行った現地調査の結果を用いながら、国境を越え、日本へ就労に行く人々の多様な現実を描き出すことを試みたい。「デカセギ」を経験した2世・3世による語りをここに記すことは、「ブラジル人」という言葉が持つ意味内容を豊富化させることにもつながるだろう。

第2項 トメアスーにおける「デカセギ」の諸形態

1世の女性に続いて、トメアスーにおける「デカセギ」の中心となった日系2世、および3世による「デカセギ」はどのように特徴づけることができるだろうか。

以下の表12-6は、トメアスーから「デカセギ」に行った人たちが、現在もなお「デカセギ」を継続しているのか、あるいは帰国をしているのかということについて、その性別、および世代ごとにまとめたものである。

表12-6 「デカセギ」の継続状況

性別	世代	継続中	帰国	合計
男性	1世	1	7	8
		12.5%	87.5%	100.0%
	2世	26	20	46
		56.5%	43.5%	100.0%
	3世	6	5	11
女性	1世	2	19	21
		9.5%	90.5%	100.0%
	2世	12	11	23
		52.2%	47.8%	100.0%
	3世	0	1	1
		0.0%	100.0%	100.0%
	非日系	0	1	1
		0.0%	100.0%	100.0%
	合計	14	32	46
		30.4%	69.6%	100.0%

世代別に見ると、1世は、男性、女性ともに、約9割が「デカセギ」から帰国しているのに対し、2世や3世では、「デカセギ」を継続しているという人の割合の方が高くなっている。このように、現在もなお、日本で「デカセギ」を続けている人の多くは、日系2世・3世の世代なのである。梶田・丹野・樋口（2005）が指摘したように、「凝縮された移住サイクル」が生じており、森（1995b）が描き出した「デカセギ」とは異なった、新しい「デカセギ」がその中心になっていると言えるだろう。

そこで、以下では日系2世・3世による「デカセギ」の諸形態を、調査対象者による語りから描き出してみることにしたい。

① 2世・3世による「デカセギ」——「デカセギ」を継続する人

ここでは、まず、現段階では「デカセギ」から帰国しておらず、そのまま「デカセギ」を続けている人について取り上げることにする。前掲の表12-6で見たように、「デカセギ」に行った2世の男性の中で、トメアスーに帰ってきている人の割合は43.5%にとどまっており、56.5%が、2007年現在においても、依然として「デカセギ」を継続している。3世についても同様であり、過半数の人が、やはり「デカセギ」を継続している。

このような人たちは、どのくらいの期間にわたって「デカセギ」を続けているのだろうか。以下の表12-7は、2世および3世の「デカセギ」継続者が、どのくらいの期間にわたって「デカセギ」を続けているかということをもとめたものである。これを見ると、デカセギ継続期間が16年、17年、18年に及んでいるという人の割合は、あわせて58.1%に達しており、「デカセギ」の「長期化」が進んでいることがわかる。

表12-7 2世・3世の「デカセギ」継続者の「デカセギ」期間

	度数	パーセント
1年未満	1	3.2%
1年	1	3.2%
2年	1	3.2%
3年	1	3.2%
4年	0	0.0%
5年	1	3.2%
6年	2	6.5%
7年	1	3.2%
8年	1	3.2%
9年	1	3.2%
10年	0	0.0%
11年	1	3.2%
12年	1	3.2%
13年	0	0.0%
14年	0	0.0%
15年	1	3.2%
16年	3	9.7%
17年	9	29.0%
18年	6	19.4%
合計	31	100.0%

家族の多くが、長期間「デカセギ」に行っている例としては、まず、No.37の家族（家族No.37）を挙げることができる。現在トメアスーに戻ってきている男性（個人No.90）によれば、家族は、8人兄弟であったが、弟が「デカセギ」に行きたいと言いだしたため、この男性を含めた兄弟5人で、1989年に日本に向かっている。その後、この男性と弟1人は帰国したものの、その他の3人は帰国せず現在に至っている。これとは別に、兄（個人No.92）も「デカセギ」に行っているため、8人兄弟のうち、現在4人が日本にいるという状況になっている。男性は、日本に残った弟たちについて、以下のように語っている。

もう、帰ってこないのではないか。子どもたちも、学校に行っているし。子どもたちが学校に行きだしたら駄目。もう、帰ってこない。

このように、この男性は、弟たちがトメアスーに帰ってくる可能性は低いと考えている。ただ、弟たちにとっては、たとえ帰ろうと思っても帰る条件がないということなのかもしれない。この家族は、約300ヘクタールの農地を持つ農家を営んでいるが、既にこの男性（個人No.90）が、後継ぎとしてトメアスーに帰っている。また、現地のブラジル人労働者を雇っているため、農作業に必要な労働力も確保されているのである。実際、ブラジルにいる他の兄弟は、農業に従事しておらず、会社員をしたり、レストランを経営したりしている。現在、一番下の弟のみが、調査対象者の男性と一緒に同居しているという状況である。このように、既に兄弟の一人が農業を継いでいる状況の中、雇用機会に恵まれているとは言えないトメアスーに戻ることは、それほど容易なことではないのである。

ただ、トメアスーに帰る条件があり、親も帰郷を望んでいても、子どもが日本で「デカセギ」を続けているというケースも当然存在する。No.24の家族（家族No.24）は、長男がすでに農業を継いでいるものの、次男用の耕作地も既に100町歩ほど準備しており、トメアスーに帰ってきた場合に農業を始める基盤は整っている。父親（個人No.48）は、次男に帰って来て欲しいと考えているが、日本で結婚し、家族もいるので、次男が帰ってくることはないだろうと考えている。また、次男が「デカセギ」に行く際に強く反対したので、次男とは気まずい関係になってしまったと語っている。

今、次男は、家族で日本にいる。お金を工面して、次男を送り出してやれば良かったんだけど、自分は、デカセギというものが嫌いだったので。次男は、岐阜の方の工場で働いている。結婚相手は、台湾の人だと聞いている。日本で知り合ったのだろう。おそらく次男は帰ってこないだろう。4耕地（100町歩）を次男の名義で買っている。日本でうまくいかなかったら、帰ってきて百姓をやる可能性もあるので。自分としてはやってもらいたい。

上記のような大規模農家ではなく、農地面積が100ヘクタールに満たないような比較的小規模な農家では、後継ぎとして農業を続けるという選択をする子どもが、一人もいないという場合も多い。この場合、子どもたちは、必然的に他の職業で生計を立てることになる。そうした際、「デカセギ」に行くことは、最も身近な選択肢の一つである。対象者No.29の家族では、子どもたち全員が、「デカセギ」に行っており、両親だけが、トメアスーに残って農業を続けている状況である。母親の女性（個人No.65）は、以下のように語っている。

対象者：うちは、そんなに大きくない。ピメンタが少ししかとれない。

調査者：どのくらいの面積ですか？

対象者：3耕地。

調査者：じゃあ75町歩はあるわけだ。日本に比べたら、ずいぶん大きい。

対象者：でも、経費がかかってしょうがない。無駄を省いているが、儲からない。

調査者：後継ぎは？

対象者：継ぎたくないのでは。やりたいという人もいない。

No.53の家族（家族No.53）も、後継ぎがいらない。農地の面積は、約70ヘクタールである。子ども

たちは、全員「デカセギ」を経験しているが、現在も「デカセギ」を続けているのは次男の1人だけである。他の3人の子どもは、ブラジルに帰ってきてはいるものの、いずれも農業を継ぐことはなかった。長男はクリチーバでサラリーマンをしており、長女はサンパウロで、次女はトメアスー近辺で診療所を開設している。

このように、子どもたちが農業を継がず、別の職業に就く場合も多い。その際に、選択される「デカセギ」は、もはや一時的に家を離れて、お金を稼ぐという意味の「出稼ぎ」ではない。将来の人生を考え、日本での生活を選択したと言っても良いのかもしれない。

② 2世・3世による「デカセギ」——トメアスーに帰ってきた人

それでは、トメアスーに帰ってきた帰国者たちについてはどうだろうか。当初の予定通り、お金を稼いで帰国をしたのだろうか。それとも、別の理由で、帰国をすることになったのだろうか。以下では、トメアスーの2世・3世たちが、いかにして「デカセギ」から帰国したかということを、「デカセギ」経験者の語りから描き出すことにする。

「デカセギ」から帰国した2世・3世の語りを検討してみたところ、まず、農家の後継ぎとして、いずれトメアスーに帰ることを強く意識しながら、「デカセギ」に行っていた人の存在を指摘することができる。先に見たように、No.37の家族（家族No.37）では、家族の多くが「デカセギ」に行った経験を持っており、現在でも8人兄弟のうち、半数の4人が「デカセギ」を続けている。こうした中、次男であるNo.89の男性（個人No.89）は、後継ぎとして農業をするために、いずれ帰国するというつもりで「デカセギ」に行っていたと語っている。

デカセギは、自分にとっては非常に良かった。勉強になった。自分の場合、いずれはブラジルに戻らなければならないという覚悟で、日本に行った。ブラジルに、両親がいたので。兄貴は、若いときに家を飛び出していたので、自分が後継ぎをやらないといけないし。あとは、やっぱりトメアスーが好きだという気持ちがある。いずれ帰らないといけないという気持ちは持っていた。

上記の事例では、後継ぎとして農業をするという明確な予定が存在していたために、トメアスーに帰るという意識が強く保持されていた。ただ、家業を継がない場合でも、トメアスーへの帰郷意思を持っていたという人は多い。

例えば、個人No.23の男性の場合、家族は農業を営んではおらず、後継ぎというわけではなかったが、「デカセギ」に行くのは、独身の時だけという意識を持っていた。1994年に帰国し、「デカセギ」で得た資金をもとに、現在は、トメアスーでホテルを経営している。今後の「デカセギ」についても、結婚して家族がいるので、行くつもりはないと語っている。

また、個人No.114の男性も、子どもをトメアスーで育てたいと考え、「デカセギ」から戻ってきた。日本に滞在している間、トメアスーに帰るという気持ちは、いつも持っていたと語っている。

弟がどうしてもデカセギに行きたいと言っていたので、長男がぼくに相談して、一緒に行かないかと言われた。デカセギは1回だけ。1989年から1995年まで。デカセギには、弟と一緒にいった。残業もして。日曜日は休んでいたけど、1日14時間ぐらい働いていた。弟と一緒に住んでいた。向こうで結婚して、

弟と別々に暮らすようになった。日本に行って、4年ぐらいたったとき、トメアスー出身の女性と結婚した。妊娠2ヶ月ぐらいのときに帰ってきて、子どもはこちらで生まれた。トメアスーで子どもを育てようと思って。日本に仕事に行ってたけど、帰る気持ちはいつも持っていた。

このように、トメアスーで暮らしたいという気持ちを持つ人は多い。2世・3世の「デカセギ」帰国者に対して、将来どこに住みたいかということ聞いてみたところ、17人中16人が、トメアスーで暮らしたいと答えている（表12-8）。このように、多くの人によって、トメアスーという故郷への愛着が語られているのである。

表12-8 将来住みたい場所（2世・3世）

	度数	パーセント
トメアスー	16	94.1%
トメアスー以外のブラジル	1	5.9%
日本	0	0.0%
日本とブラジル以外の国	0	0.0%
合 計	17	100.0%

こうした故郷への愛着が帰国に対する動機付けとなっているのは確かであるが、その一方、将来を見据えた経済的な戦略がその背後に存在していることもまた事実である。個人No.46の男性は、トメアスーへ帰ってくることにした理由を以下のように語っている。

2000年に帰ってきた。日本ではいろんな仕事をして、日本で暮らしても良いなと思ったけど。未練もあったのかもしれない。どっちでもよかったんだけど。妻とは、日本で知り合った。結局、一緒に帰ってきた。こっちに帰ってきて何かをやりたいという気持ちをもって行かないと、迷ってしまう。あっちの生活に慣れてしまう。こっちに帰ってくるという気持ちがなくなる。若い人はほとんどそう。あっちの生活は、こことは違う。1年2年は、帰ってきて何かしようという気持ちを持っているが、それを過ぎてしまうと、もうこっち（日本）でもいいかなという気持ちになってしまう。帰ってこようと思った理由は、ちょうどピメンタの景気もよかったし、今帰ったらもっと農業をもっとのばせるのではないかなと思った。胡椒の値段が出てなかったら、日本にいたままだったかもしれない。兄も一人で大変だったし。

この男性は、1990年に「デカセギ」に行ってから、約10年を日本で過ごしている。「デカセギ」の期間が長くなる中で、日本の生活にも慣れ、日本で暮らしてもいいと思いはじめていたが、胡椒（ピメンタ）の値段が上がり、今帰国したら農業を伸ばせるかもしれないという考えを持ち、帰国を決断したと語っている。また、胡椒の値段が上がっていなければ、帰国しなかったかもしれないとも語っている。

第3項 農村から「デカセギ」に行くということ

前項では、「デカセギ」に行った2世・3世の中で、トメアスーに帰ってきた人々を取りあげた。その中で、帰国した2世・3世たちのほとんどが、将来もトメアスーに住みたいと考えているということが明らかになった。つまり、彼・彼女らは、基本的にはトメアスーでの生活を嫌っていないのである。彼・彼女らの特性の一つとして、身体を使った労働に親和的な文化を保持しているとい

う点を挙げることができる。

トメアスーの日系人たちが、「よく働く」という点は、調査における多くの語りからうかがうことができる。特に、戦後移住をしてきた1世は、農業をやりたいと考えてトメアスーに来た人が多く、農業をするということ、ひいては働くということに対する愛着が感じられる。1963年にトメアスーへ移住した個人No.48の男性は、以下のように語っている。

自分は小さい頃から農業が好きだった。だから、百姓をやって苦と思ったことはない。ものをつくるのが好き。デカセギをしないで、何とか頑張れないものかと思う。

こうした労働に対する親和的な文化が、2世・3世たちにも、少なからず受け継がれているように思われる。それは、彼・彼女らが「デカセギ」に行った際の、労働観にも現れている。2世である個人No.46の男性は、「デカセギ」の際の労働について、以下のように語っている。

最初は、ユニバースという会社。日産のギアをつくったり、フォードの部品をつくる会社。9ヶ月ぐらい。松下電器のエアファンをつくるラインの仕事。1年間。それから、運送屋。明治の牛乳を配達する。朝4時半から夜の8時頃まで。365日、毎日仕事。免許はブラジルで持ってたのを、日本で切り替えた。2年ちょっとやって、一度ブラジルに帰ってきた。1995年。（配達の仕事は）工場の仕事じゃないから、自分に合っていると思った。気に入っていた。

2回目のデカセギ。茨城で携帯電話の基盤をつくる仕事。1ヶ月。友達で紹介で、転職。長野オリンピックがあるということで、鉄道のレールの交換の仕事。会社よりいいと思った。いろんな所に行くので。そこで、ほとんど帰るまで仕事した。そこでは、溶接の免許もとらせてもらったし、その生活を続けていれば生活もできたんだけど。そういう仕事はなくならないので。友達は、そこで仕事を続けている。一番良かったのは、トメアスーにいたみたい、縛られない自由な感じがしたこと。溶接したら、いくらという形でお金がもらえる。工場みたいな仕事じゃなかったんで、気に入っていた。

この男性は、1年365日間毎日、朝の4時半から夜8時まで牛乳の配達の仕事をしていたが、その仕事に対して「大変だった」という言葉が使われることはない。むしろ、こうした仕事に対して、「自分に合っている」、あるいは「気に入っていた」という評価がされ、このように働くことは、当然のこととして受け止められているのである。また、鉄道のレール交換の仕事に対しても、「縛られない」、「自由な感じがした」という言葉が使われており、そのまま、日本でその仕事をしてよかったということが語られている。この男性（個人No.46）は、先に見たように、ピメンタの値段が上がったため、農業に将来性を見だし、結局トメアスーに帰るという選択を行った。

このように、彼・彼女らは、確かに身体を使った労働にたいして親和的ではあるものの、農業に対する意識に関しては、1世と2世・3世の間で齟齬が見られるように思われる。先ほどの個人No.46の男性は、以下のようにも語っている。

日本では、仕事をしていたらお金が入ってくる。給料がもらえる。今やってる農業は大変。作物をとって、それをお金にして労働者に払って…、残るものがあまりない。利益が少ない。あの頃の方が良かった。

たというか…。こちらでは使う方だから。経営は難しい。

また、個人No.57の男性は、「デカセギ」期間中の労働を、「きついと聞いていたが、そうでもなかった。ずっと日本にいてもよかった。」と語る一方で、帰国後、営んでいる農業については、「収入の60～70%が労働者の労賃に消える。手元に残るのはほとんどない。何をやっているのかと思うときがある」と語っている。

このように、「デカセギ」を経験した人からは、日本で給与所得を得ることの良さが語られる一方で、トメアスーにおける農業の厳しさが語られるのである。

トメアスーの2世・3世たちは、基本的に身体を使った労働に対して親和的な文化を保持しており、日本での「デカセギ」労働に対して、それほど違和感を持っている様子はない。つまり、彼・彼女らは、円滑に「デカセギ」を遂行できる資質を備えているのである。

こうした状況の中、日本での労働の「大変さ」と、故郷で農業を行う「大変さ」を比較した上で、日本での労働を選ぶという決断がされる場合も、当然生じているだろう。日本で「デカセギ」を続けるという選択をした2世・3世、あるいはトメアスーに帰るという選択をした2世・3世たちが、今後、どのような生活を送っていくのかということについては、トランスナショナルな枠組みで、そのあり方を記述していく必要があるだろう。その点については、今後の課題としたい。

第4節 デカセギと地域社会

第1項 はじめに

これまでの2つの節で確認してきたように、日本へのデカセギは、デカセギ者自身や留守家族にとって、大きな影響を及ぼしてきた。しかし、その影響は、諸個人のレベルだけではなく、地域社会レベルにも大きな影響をもたらしている。そのため、本節では、デカセギがトメアスー移住地の人々やトメアスー移住地という地域社会そのものにいかなる影響を与えたのかを明らかにすることを目的とする。そこで、トメアスー移住地に暮らす人々の生産・生活の状況、デカセギによる変化、トメアスー移住地についての考え方などを順に明らかにしていきたい。

第2項 トメアスー移住地での生産と生活

まず、前掲表12-4を見ながら、トメアスー移住地に暮らす人々の生活状況を概観する。

トメアスー移住地での居住年数は、例外的に1年という者がいるが、それ以外は20年以上となっている。具体的には、20～30年未満が3人（5.4%）、30～40年未満が10人（18.0%）、40～50年未満が17人（30.6%）、50年以上10人（18.0%）で、最長は61年となっている。平均は41.4年である。40～50年未満が特に多く、1960年前後に入植ないし出生した者が中心となっている。

トメアスー移住地に入植した者のほとんどは、農業を営んだ。そこで、現在の農業の状況を見てみると、農業を営んでいることが確認できたのは34人（63.0%）である¹⁰⁾。大半が大規模農業であり、農地面積を見ると、50ha以上の農地を持つ者が24人（70.6%）に達している。このうち、平均すると約50%を耕作に充てている。現在栽培している作物は、ピメンタと、クプアスやアサイーなどのフルーツが中心となっている。この点は、CAMTAのジュース工場の設立とも呼応するものと捉えられる（第1節参照）。ただし、ピメンタを主要作物として挙げていない農家も17人（50.0%）に達しており、ピメンタ中心の農業が転換しつつある状況が看取される。実際、この10年間で作付

面積がもっとも減少した作物としてピメンタを挙げる者は13人（38.2%）にのぼる。その代わりにカカオなどの品目が増えている。

しかし、ピメンタからの転作は、農業収入の増加には結びついていない。最近10年間で農業収入が増加したと答えたのはわずか4人（11.8%）にとどまっており、「一定」が10人（29.4%）となっている。逆に減少したと答える農家が最も多く、17人（50.0%）に達している。農業収入減少の理由としては、「ピメンタ病害による収量低下」（5人）、「ピメンタの価格低迷」（3人）など、栽培や販売面でのピメンタの扱い方の難しさと、その穴を埋めることができていない状況が見て取れる。一方、なかには「日本から帰ってきて、稼いだお金を農業につぎこんだ」（個人No.27）ために農業収入が増加したとする者も少なからず存在する。ピメンタ単作からの転換をいかなる形で乗り切るかに、個々の農家の生き残り策が見出される。

ただし、個々の農家だけでは限界もある。そこで、トメアスー移住地の農業にとって必要だと考えられることを見ると、ピメンタを中心とした作物の栽培に必要な灌漑設備の整備、農業融資の充実、そしてジュース産業の推進などが目立つ。一方、トメアスー総合農業協同組合（CAMTA）への期待は、必ずしも高くはない。「ジュース産業。より品質の良いものを生産して、販売を拡張。安心して農業ができるように」（個人No.39）や、「自然農法という点を強調して、ジュースを売り出して欲しい」（個人No.41）との声も少なからず存在する。しかし、「組合員ではない」や「自分のことで精一杯」などという回答も多く見られた。なかには、「組合全体で（やると）赤字が出る。……農業者の立場からいえば、生産物だけを扱うべき。それ以外の売掛、買掛が生じると、どうしても面倒になる。販売面は組合員が持って、個人の才覚でやればいい」（個人No.71）など、CAMTAが抱え込みすぎるのではなく、個々の農家の自主性を求める志向性も存在している。

一方、生活面での基盤を提供しているトメアスー文化協会（ACTA）との関わりはどうだろうか。文化協会の活動への参加状況を見ると、「文化活動・行事」が62.1%、「スポーツ活動」が55.2%、「総会」が44.8%など、半数前後の参加者を集めている活動がいくつか見られる。全体の回答数からみると、一人当たり3～4の活動に参加している計算となる。加えて参加の頻度を尋ねると、「1週間に1回」が最も多く35.7%、次いで「1ヶ月に1回」が14.3%となっている。頻度の高い方から順に並べた「ほとんど毎日」「1週間に2～3回」「1週間に1回」「2週間に1回」をあわせると53.6%となり、過半数が2週間に1回以上は文化協会を利用していることがわかる。これらのことから、トメアスー移住地の日系人にとって、文化協会は一定の地位を占めるものとなっていることがうかがえる。

ただし、文化協会に対する個々の関わりや思いは多様である。文化協会に望むことを見ると、「必要な活動はほとんど行われている」（個人No.46）、「今のところ、満足していると思う」（個人No.60）などと現状の文化協会を評価する声がある。一方、「ほとんど関わりがない。会員でもない」（個人No.27）との回答もあり、日系人の文化協会離れも一定程度見受けられる。ただし、文化活動、スポーツ活動、農業振興から福祉まで、文化協会に期待を寄せる人々が多数派である。これらの活動に取り組んでいくことができれば、文化協会の重要性は一層高まることになると思われる。

以上のように、生活面では文化協会を基盤として日系人同士の支え合いを志向する傾向が見られる。他方、生産面でも、CAMTAによる農業環境の向上が期待されている半面、個人で自由に農業を行おうという考え方も見られる。その際、農業資金を獲得する手段として大きな意味を持つのが

デカセギである。

このような経緯で行われたデカセギであるが、実際には、トメアスー移住地に何をもたらしたのだろうか。そこで、以下2項にわたって、デカセギ経験者本人と、留守家族のそれぞれの視点から見たデカセギの影響について検討していくことにしたい。

第3項 デカセギ経験者本人から見たデカセギの影響

デカセギがトメアスー移住地にもたらす影響として真っ先に思いつくのは、経済的な影響である。そこで、デカセギ経験者が留守家族に行っていた送金の実態を確認する。この点をまとめた表12-9を見ると、送金の実態は多様であることがわかる。送金額は収入にある程度規定されるところがあるとはいえ、収入が多ければ送金も多くなるという直線的な関係は見られない。収入の比率でいっても、月収の3/4程度を送金していた者もいれば、まったく送金していない者もいる。ただし、送金していないからといって、デカセギの稼ぎがトメアスー移住地にまったくもたらされていない、というわけではない。帰国の際に、それまで貯めた資金をまとめて持ち帰ることもありうる。このあたりは、各自のデカセギ見通しに規定されることとなる。そこで、デカセギ時の帰国の見通しと成果を確認してみたい。

表12-9 デカセギ経験者の最長職の平均月収と送金の状況

個人No.	最長職の平均月収	送金の状況
2	30万円	3ヶ月ごとに10万円
5	35万円	送金しなかった
6	30万円	1ヶ月ごとに15万円
7	30万円	1ヶ月ごとに15万円
8	15万円	1ヶ月ごとに12万円
11	20万円	1ヶ月ごとに20万円
12	30万円	合計50万円
18	30万円	1ヶ月ごとに16万円
22	45万円	1ヶ月ごとに5.5万円
25	24万円	1ヶ月ごとに3万円
27	32万円	送金しなかった
29	50万円	1ヶ月ごとに2500ドル
31	50万円	1ヶ月ごと（金額は不明）
34	30万円	不定期に送金（金額は不明）
35	50万円	不定期に送金（金額は不明）
39	40万円	不定期に送金（金額は不明）
46	35万円	不定期に送金（金額は不明）
51	30万円	不定期に送金（金額は不明）
52	18万円	1ヶ月ごとに5万円
57	37万円	不定期に送金（金額は不明）
60	52万円	送金しなかった
65	55万円	NA
72	40万円	送金しなかった
73	40万円	不定期に送金（金額は不明）
75	30万円	1ヶ月ごとに2万円
90	200万円	不定期に送金（金額は不明）
102	45万円	不定期に送金（金額は不明）
101	40万円	1ヶ月ごとに30万円
105	25万円	2ヶ月ごとに15万円
108	15万円	3ヶ月ごとに10万円
110	20万円	1ヶ月ごとに5万円
114	48万円	不定期に送金（金額は不明）
116	31万円	1ヶ月ごとに12万円
118	40万円	1ヶ月ごとに20万円
124	36万円	1ヶ月ごとに18万円
126	30万円	不定期に送金（金額は不明）
125	30万円	不定期に送金（金額は不明）
130	32万円	1ヶ月ごとに10万円

注) 1. 金額は概数。
2. 不明・無回答を除く。

デカセギ時の帰国見通しを見てみると、「お金が貯まったら帰国する」(44.4%)、「何があっても帰国する」(25.0%)の2項目で7割近くを占めており、基本的には帰国希望を持っていたことがわかる。ただし、帰国するか否かは「お金が貯まっ」ているか否かに規定されるところがあり、この点での判断がデカセギの期間と関連を持っていると考えられる。その「お金が貯まっ」ているかどうかという点を含めたデカセギの成果の評価を見ると、こちらも多様な状況となっている。ただし、同じ資金でも、「住宅資金は貯まったが、事業資金は不十分」といった評価（たとえば、個人No.102）のように、それぞれの項目ごとに目標が設定されていたことがうかがえる。トメアスー移住地のデカセギ経験者の一部には、このような綿密な目標設定の下にデカセギが行われていることがうかがえる。

項目ごとにデカセギの成果を見てみると、「日本人の友人・知人が増えた」「日本語や日本の文化を学んだ」を「十分」ないし「まあまあ」と評価した者は65.8%にのぼる。これら日本との間の人的・文化的交流は、デカセギの大きな成果として認識されている。

一方、トメアスーでの生活に関わるものとしては、「不動産や住宅を買う資金がたまった」（「十分」「まあまあ」が63.2%）が挙げられる。また、「ブラジルでの生活資金を稼いだ」（「十分」「まあまあ」が57.9%）も、成果を指摘する声が高い割合となっている。このように、日々の生活や、生活の拠点である住宅面での整備にも、デカセギは大きな効果をもたらしたことがうかがえる。

他方、生産活動に関しても「事業資金が貯まった」（「十分」「まあまあ」が60.5%）と、農業を中心とした事業への投資資金も、デカセギによってかなり蓄えることができたことが見て取れる。農業収入の多寡と「事業資金が貯まった」という成果とを照らし合わせた表12-10を見ると、農業収入の増加が見られた層は「十分」ないし「まあまあ」という評価をしていることがわかる。このように、デカセギで得た資金を着実に農業に投資し、収入拡大に結び付けている様子も見られる。ただし、資金面ではなく技術面での成果は、それほど芳しくない。「仕事上の技術や技能が身についた」を「十分」ないし「まあまあ」とした者は39.5%にとどまっている。これは、デカセギ中に就いた仕事の多くが工場労働であるのに対し、現在のトメアスーでは多くが農業に従事しているというギャップに基づいていると考えられる。仕事内容が違うため、なかなか技術が生かせない状況になっている。

表12-10 農業収入の傾向と事業資金についての評価

		デカセギの成果・事業資金が貯まった				
		十分	まあまあ	あまり	まったく	NA
農業収入	増加	2	1			
	一定	1	3	1		1
	減少	2	4	2	1	3
	DK	3	1	3	1	
	NA				1	1
非農家			4	1	1	

注) 単位=人。

また、所属階層という点で見た場合も、デカセギの成果を見出すことができる。表12-11は、デカセギ前の所属階層とデカセギ後の所属階層をクロス集計したものである。ここからは、デカセギ前の所属階層が「中の上」や「中の中」であった者たちには、ほとんど変化が見られないことがわ

かる。一方、「中の下」では71.4%が「中の中」に、「下」では50.0%が「中の中」や「中の下」に上昇していることがわかる。少なくとも、デカセギ前の所属階層が低い者たちにとっては、デカセギは階層上昇という成果をもたらしたことがうかがえる。

表12-11 デカセギ前後の所属階層の変化

		デカセギ後					N
		上	中の上	中の中	中の下	下	
デ カ セ ギ 前	上	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0
	中の上	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0	3
	中の中	0.0	7.7	84.6	7.7	0.0	13
	中の下	0.0	0.0	71.4	28.6	0.0	14
	下	0.0	0.0	25.0	25.0	50.0	4
合計		0.0	11.8	64.7	17.6	5.9	34

注) 不明・無回答を除く。

それでは、個人的な成果にとどまらず、広くトメアスー移住地全体に対する影響として考えた場合、どのようなものが見出せるだろうか。影響はないとする回答が少なからず見受けられるが、デカセギ資金による起業や勤勉意識の伝播など、客観的なものと主観的なものの両面で影響を及ぼしていることもうかがえる。また、「デカセギに行って帰ってこない、トメアスーが発展しない」（個人No.114）との声も聞かれるように、デカセギは個人的な利益だけではなく、トメアスー移住地そのものにも発展の契機をもたらすものであることも認識されている。

また、将来暮らしたい場所については、96.9%がトメアスーと答えている。ここには、生まれ育った場所としてのトメアスーへの愛着もあるかもしれない。しかし、それだけではなく、ここにはデカセギによって持ち帰った資金、技術、意識などを糧として、トメアスー移住地をさらに発展させたいという決意を読み取ることもできるのではないだろうか。

第4項 留守家族から見たデカセギの影響

それでは、デカセギを送り出した留守家族は、デカセギの影響をどのように見ているのだろうか。この点を明らかにするために、まずは送金の状況から確認する。そこで、この点をまとめた表12-12を見ると、「送金はない」というケースが6人（37.5%）いることがわかる。送金を受けているケースが多数であるとはいえ、まったく送金を受けていない家族も存在する状況がわかる。送金の金額はまちまちだが、総じて額が大きい方が留守家族の満足度も高くなっている。ただし、送金の使途については、生活費が中心であり、事業資金や投資にあてる場合はそれほど多くない。前項でも見たように、デカセギ者自身は、デカセギで得られた資金は、生活と事業の両面にわたって大きな成果をもたらしたと認識している。しかし、留守家族の側から見ると、デカセギの資金は、日々の生活費の補填が第一の使途とされていることがわかる。

表12-12 留守家族が受けた送金の状況と使途

個人No.	送金の状況	送金の使途	送金額の満足度
1	1ヶ月ごとに2400REAL	生活費、借金返済、事業資金	十分だ
12	送金はない	—	—
18	送金はない	—	—
22	1ヶ月ごとに300REAL	生活費	まあまあ十分
32	2ヶ月ごとに1000ドル	子どもの教育費	十分だ
41	送金はない	—	—
48	送金はない	—	—
52	2ヶ月ごとに2000REAL	生活費	あまり十分ではない
60	送金はない	—	—
65	不定期に送金（金額は不明）	NA	NA
73	1ヶ月ごとに1000REAL	NA	NA
84	定期的に送金（金額は不明）	NA	NA
87	不定期に送金（合計10000REAL）	ものを買う	足りない
97	送金はない	—	—
118	定期的に送金（金額は不明）	貯金あるいは投資	まあまあ十分
130	1ヶ月ごとに700REAL	生活費、電話代、電気代、医療費、保険料	十分だ

注) 1. 金額は概数。
2. 不明・無回答を除く。

デカセギの受け止め方については、どうであろうか。留守家族のデカセギの捉え方を見ると、デカセギは、資金や技術を得る機会として捉えられていることがわかる。一方、日本での生活経験については、資金や技術の獲得に比べれば重視されていない。この点も、デカセギ者が日本との人的・文化的関わりの面を高く評価していることと対照的である。

一方、周囲からはどの点に関心が集まっていると感じているのだろうか。留守家族に尋ねると、デカセギに対する関心は総じて低い。比較的高いものとしては「日本での生活経験への関心・羨望」があり、日本での生活については関心が示されていることがうかがえる。その他、「デカセギの成果（お金）への関心・羨望」も感じている者が比較的多いが、それでも日本での生活経験に対してよりは消極的である。このように、周囲の人々は、デカセギに対して積極的な関心はあまり示していないことがわかる。

このようなデカセギによって、トメアスー移住地にはどのような影響がもたらされたと捉えられているのだろうか。まずは、起業を通じた地域発展という影響の存在がうかがわれる。しかし、一部の成功者も存在するが、デカセギによる資金は、全体としてみると起業や投資にまで向かうケースはそれほど多くない。そのため、デカセギが起業を通じた地域発展に貢献する状況は、それほど多くは見られないことも予想される。その結果、「帰って来ても仕事がないから帰って来ない方が良い」（個人No.97）という声も聞かれるようになっている。少なくとも留守家族の視点からは、デカセギがもたらす恩恵は留守家族の生活費の補完にとどまることが多く、トメアスー移住地そのものに及ぼすレベルにまではなかなか達していないことがうかがわれる¹¹⁾。

第5項 おわりに——デカセギ経験者を生かす仕組みづくりに向けて

最後に、本節での検討を通じて明らかとなったことを2点ほど指摘したい。

第1に、デカセギ経験者本人にとっては、デカセギは大きな成果をもたらすものであった。デカセギを通じ、資金や技術、そして勤勉意識など、客観的な面から主観的な面まで、デカセギ経験者は多くの糧を手に入れたと認識している。それらを生かして、トメアスー移住地の発展に貢献したいと考えている様子も見て取れた。

しかし第2に、留守家族や周囲の人々は、デカセギ経験者がもたらした成果を、十分に受け止め

きれていない。留守家族が受けた送金の大半は生活費の補填にとどまり、農業拡大につながるような投資にまでは結びついていない。また、周囲の人々は、少なくとも表向きはデカセギに強い関心を抱いている様子はいかたがえない。このような状況にあるため、デカセギ経験者が手に入れた資金、技術、意識などの糧は、トメアスー移住地に暮らす人々に十分に伝達されるような状況にはなっていない。

そこで今後は、デカセギ経験者を生かす仕組みづくりが必要となる。第1節でも指摘したように、デカセギ経験者が持ち帰った成果を生かす受け皿として、CAMTAがジュース工場を整備したという経緯がある。そのようなハード面の対応は、意義深いものであろう。ただしそれだけでなく、ソフト面の対応として、デカセギ経験者が手に入れた糧とかれらの意欲とをしっかりと受け止めることも重要である。デカセギは、デカセギ経験者本人や家族だけではなく、トメアスー移住地にも生かせる成果を内包している。そこで、CAMTAや文化協会などでもデカセギ経験者に活躍の場を与えることで、デカセギで得た成果をトメアスー移住地全体に還流させるような仕組みを構築することが、トメアスー移住地の発展にとって大きな意味を持つのではないだろうか。

第5節 まとめ——トメアスー移住地にとってのデカセギの意味

以上、トメアスー移住地におけるデカセギの影響を、さまざまな観点から探ってきた。これらの知見をまとめると、以下の諸点を指摘できよう。

第1に、先行研究で指摘されていた1世の妻のデカセギは、基本的にトメアスー農業を支えることになっていた。妻たちの稼ぎは、基本的には夫が担う農業の資金として使われていた。その意味ではあくまで主たる生産は農業であり、ブレッドウィナーは夫であるという生産面でのジェンダー構造は維持された。しかし、稼ぎをもたらした妻たちには、家庭生活における発言権がもたらされることになった。このことは、いわば家庭内ガバナンスに、女性が参加する権利を得たことを示している。その意味で、生活面では、従来のトメアスー移住地の構造を変容させる契機が内包されたと見ることができる。

一方、第2に、2・3世のデカセギを見ると、1世のデカセギとは異なった様相が見られた。2・3世のデカセギ者は、デカセギに出向いてはいても、トメアスー移住地に愛着を持っており、そうであるがゆえにトメアスーに戻ってきている者も多かった。また、トメアスー移住地で育ったという意味で「農村型」の2・3世たちは、肉体労働のつらさを苦にする様子があまり見られず、むしろ親和性を持っていると受け止められた。このように肉体労働に親和性を持つハビトゥスが、日本でのデカセギにおける長時間の肉体労働を勤めあげる素地となっていることが明らかとなった。ただし、肉体労働という点で共通するトメアスーの農業と日本でのデカセギだが、それを通じて得られる収入には、質的・量的な差異があった。トメアスー農業では、農産物価格が高騰すれば収入は高いが、非常に不安定で、事業への投資資金もかさむ。それに対し、日本のデカセギでの収入は、安定的で、働いた分だけ確実に反映される。近年、ブラジル政府による定住支援という政策転換が推進されていることと重ね合わせると、かれらを再度日本へと送り出す動きをアシストする可能性も存在している。

ただし第3に、総じていえば、デカセギはトメアスー移住地にとって積極的な影響をもたらしていた。実際に、デカセギの資金を使って農業収入の拡大に成功した者や、階層上昇を（主観のレベ

ルとはいえ）経験した者も一定数見られた。また、留守家族の側からみれば、デカセギで稼いだ分を日々の生活費に使うので精一杯であったが、たとえ生活費ですべて消えてしまったとしても、トメアスー移住地の生活を維持するのには貢献したと捉えられる。また、今は十分に生かされていないが、デカセギ経験者が持つ技術や意欲も、トメアスー移住地の維持・発展にとって大きな資源となりうる。その意味で、トメアスー移住地は福博村とはやや趣が異なり、デカセギはトメアスー移住地というコミュニティを存続させ、今後につなげる基盤を形成したといえよう。

トメアスー移住地には、ジュース工場もつくられ、アグロフォレストリーと呼ばれる新しい農業形態も普及している。その意味では、トメアスー移住地の農業には、これから開花する大きな可能性を見出すことができる。そのためには、デカセギの成果を、資金面だけでなく、デカセギ帰国者の技術や経験なども含め、十全に活用していくことが欠かせないだろう。

注

- 1) 2007年8月に行ったトメアスー文化協会への聞き取り調査、ならびに「トメアスの歴史」(<http://tome-acu.hp.infoseek.co.jp/history1.htm>, 2008.2.14) より。
- 2) 同上。
- 3) 「混植が生む黒いダイヤ 森の再生と収穫両立 ブラジル移民・入植78年の地トメアス」『朝日新聞』2007年12月7日付。
- 4) この「混植」は、「アグロフォレストリー」といわれ、大きな注目を集めている。同上新聞記事を参照。
- 5) 同上。
- 6) 妻の出稼ぎが多くなっているのは、夫がデカセギに出られないことと深く関わっている。夫がデカセギに出られない理由としては、(1)日系人農家が雇っているブラジル人労働者に適切な指示を与えられるのが夫であるから、(2)運転免許を持っているのが夫だけであることが多く、夫がいなくなると日常生活が成り立ちにくくなるから、(3)トメアスー移住地では、夫のデカセギより妻のデカセギの方が高い給料が手に入れられるという認識が広まっているから、といったものが挙げられる（森 1995b:564-6）。さらに夫がデカセギに出ず、トメアスー移住地にとどまる理由としてもう一つ考えうるのは、治安の問題である。実際、トメアスー移住地の日系人を対象にした調査からは、「まだまだ治安が悪いと思います」や「ごみとか治安が悪い。家が泥棒にあった」といった声も聞かれている。しかし、われわれの研究グループが2006年に調査を行ったサンパウロ州スザノ市福博村の治安の状況（小内・小野寺 2007:25-31）に比べると、トメアスー移住地の治安の状況は相対的に良好のように感じられる。今回の調査からは、家族がデカセギに出ている間の心配事として「治安」の問題を挙げたのは、デカセギ経験者で3人（7.5%）、留守家族で2人（9.5%）にとどまっている。
- 7) 前掲「混植が生む黒いダイヤ 森の再生と収穫両立 ブラジル移民・入植78年の地トメアス」『朝日新聞』2007年12月7日付。
- 8) コガ（1997）は、日系ブラジル人のデカセギにおける家族関係の役割と変容に焦点をあてるなかで、50代以上の女性デカセギ経験者の場合には、ブラジルでの生活は基本的に安定しており、起業目的をもつ者は少なく、むしろ、「一度は日本へ行きたい」「自分のお金を稼いで自由に使い

たい」という目的をもった人の方が多くみられること、帰国後の感想としては「日本へ行く前より自分に自信がついた、あるいは夫や子どもにお金をもらわなくても良くなったことで、自立心が芽生えた」という答えが多かったことを指摘している。山中（1999）も、シニア女性にとってのデカセギについて、「金銭のためだけではなかったこと、ブラジルに残してきた家族への心配があったこと、ブラジルがなつかしかったこと、賃金を稼ぐことが女性たちの自信を強め、夫に対して自己主張できるようになったこと」などをあげている。

また、既婚女性のデカセギに関しては、小ヶ谷（2000, 2002, 2005）のフィリピン農村女性のデカセギ研究を参照した。フィリピンとブラジルとではデカセギ事情は異なるが、女性の婚姻上の地位の違いが国際労働移動の経験を差異化させる点について分析がなされており、トメアスーの日系女性のデカセギを考察するうえで示唆的である。本節では、小ヶ谷にならい、必要に応じて、ブレットウィナー、サイドラインという語を使用する。

- 9) 付添婦とは、「看護婦のような資格は必要なく公営・民営の職業紹介所を経由して家庭や病院の患者の身の回りの世話をするいわゆる“単純労働者”」（篠塚・横村 1990）を指すが、病院を職場とする者が大部分であったところから、「医療機関へ紹介された家政婦」といってよいだろう。これは、「昭和27年に職業安定法施行規則が改正され、有料職業紹介事業として家政婦が位置づけられ、付添看護に従事する者が看護婦から家政婦へ転換してい」ったことによる（野村 1990）。1996年時点で付添看護の97%以上が家政婦によって占められていたという。

この業界に日系ブラジル女性が参入するに至ったのは、家政婦の高齢化による労働者不足を解決するためであった。1988年日本臨床看護家政協会が中心となり、日系ブラジル女性を迎え入れたのが始まりである。協会によれば、1987年、サンパウロの人材派遣会社が協会に対して日系女性の受け入れを要請したのが発端であった。派遣会社は、女性が日本で安心して働ける職場を探しており、「付添家政婦」という職業を「ブラジルの日系人社会も高齢化を迎えつつあり、日本で看護補助の技術、心得を学んだ人たちが必要になってくる」として評価したというのである。協会は労働省や外務省の指導を受け、関係紹介所と連絡をとりながら、1988～1990年で12回約300人を受け入れたという（板垣 1990）。

- 10) 農業以外の者については、ほとんどが不明・無回答であり、どのように生計を立てているのかは捉えきれない。「自営業」（個人No.125）に従事していると回答する者もいる。
- 11) ただし、「女が男（夫）に対して発言権が増した。お金を持って来た」（個人No.22）という興味深い指摘もある。トメアスー移住地のデカセギは、女性中心に行われてきた（第1節参照）が、このことが女性の地位向上に結びついた側面がうかがえる。この点については、第2節で詳しく検討している。

参考文献

- 蒲生正男, 1978, 『増訂・日本人の生活構造序説』ペリカン社。
- イシ, アンジェロ, 2008, 「ブラジル政府による在外市民政策の変遷——在日ブラジル人に対する支援策を中心に」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書26 日系ブラジル人のデカセギと国家の対応』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室, 11-24。
- 石川雅典, 1995, 「出稼ぎ送実の実態と家庭・地域生活——アマゾン地区日系集落地の留守家族,

- 出稼ぎ経験者の調査から」渡辺雅子編著『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人（上）論文篇〔就労と生活〕』明石書店，585-604.
- 板垣健行，1990，「ブラジルからやって来た付添家政婦さんの受け入れをして」『民営職業紹介——ひと』全国民営職業紹介事業協会，4：8-10.
- 梶田孝道・丹野清人・樋口直人，2005，『顔の見えない定住化』名古屋大学出版会.
- コガ，エウニセ A. イシカワ，1997，「国際労働力移動における家族関係の役割と変容——来日日系ブラジル人の場合」『Sociology today』8，1-17.
- 森幸一，1993，「アマゾン地域からの日系人出稼ぎ現象——トメ・アスー移住地の事例を通して」『移住研究』30，120-39.
- ，1995a，「ブラジルからの日系人出稼ぎの特徴と推移」渡辺雅子編著『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人 上 論文篇〔就労と生活〕』明石書店，491-546.
- ，1995b，「日系集団地についての『出稼ぎ』のもつ意味」渡辺雅子編著『共同研究出稼ぎ日系ブラジル人 上 論文篇〔就労と生活〕』明石書店，547-84.
- 野村陽子，1996，「付添看護解消の実態と今後の動き」『健康保険』50(5)，28-35.
- 小ヶ谷千穂，2000，「フィリピン農村女性の海外出稼ぎとジェンダー関係の相関——ケーススタディからの考察」『アジア女性研究』9，74-80.
- ，2002，「ジェンダー化された海外デカセギと「矛盾した移動」経験——フィリピンの事例から」『年報社会学論集』15，189-200.
- ，2005，「海外就労と女性のライフコース——フィリピン農村部の若年シングル女性と世帯内関係を手がかりに」『ジェンダー研究』25，99-111.
- 小内透，2008，「在日ブラジル人のトランスナショナルな生活世界の可能性」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書26 日系ブラジル人のデカセギと国家の対応』北海道大学大学院教育学研究院教育社会学研究室，1-10.
- 小内透・小野寺理佳，2007，「大都市近郊農村から見たデカセギの意味——サンパウロ州スザノ市福博村を事例として」小内透編著『調査と社会理論・研究報告書24 日系ブラジル人のトランスナショナルな生活世界の諸相』北海道大学大学院教育学研究科教育社会学研究室，15-77.
- 篠塚英子・横村愛，1990，「高齢化時代の女子労働——付添婦の歴史的変遷と現状」『季刊社会保障研究』26(3)，270-282.
- 須田和子・萩原康子・宮城洋子，1975，「病院付添婦の雇用と労働条件」『労働科学』51(12)，717-730.
- 田中規子，1996，「アマゾン熱帯地域における日系協同組合の経営危機とその要因分析——トメアス総合農業協同組合を事例として」『農経論叢』52，181-191.
- 山本正三・松本栄次，1999，「アマゾン・トメアス入植地における日系人農業の変容」『獨協経済』70，7-15.
- 山中啓子，1999，「日系ブラジル人女性の日本逆流出稼ぎ現象——世帯ストラテジーと「故国」追求」『日米女性ジャーナル』25，63-88.
- 渡辺雅子，1995，「日系ブラジル人出稼ぎ者の生活世界——ライフスタイルの変化と地域生活」『都市問題』86(3)，17-29.

渡辺雅子編著，1995，『共同研究 出稼ぎ日系ブラジル人 上 論文篇 [就労と生活]』明石書店。

（はじめに：新藤慶・小野寺理佳・濱田国佑、第1節：小野寺・濱田・新藤、第2節：小野寺理佳、
第3節：濱田国佑、第4節：新藤慶、第5節：新藤・小野寺・濱田）